高麗時代の「叛逆伝」研究Ⅳ

――立伝人物の分析――

西　川　孝　雄

はじめに
1．叛乱の世紀と反蒙闘争
2．『高麗史』列伝「叛逆」㈣
（i）立伝人物史料
㈡「叛逆」㈣の人物分析
小 結 論

はじめに

先に，高麗時代の「叛逆伝」研究Ⅲ――立伝人物の分析――（愛知学院大学人間文化研究所紀要『人間文化』第22号）を発表した。そこでは主に『高麗史』列伝の「叛逆」㈢に見える立伝人物４名を分析した。列伝第四十二「叛逆」㈢に集録されていた４名は第19代明宗王代から第23代高宗王代までの人物である。この立伝人物４名は武臣で崔氏武人政権創立者の崔忠献（1149～1219）をはじめとして瑀（怡）（？～1249年），沆（？～1257年），竑（？～1258年）の４代にわたって武臣政権を担当した人々である。

今回は列伝第四十三に集録されている第21代熙宗王代から第25代忠烈王代までの立伝人物16名について分析検討をしてその特色を解明したいと思う。この立伝人物16名の内，第23代高宗王代から第24代元宗王代までの人物が14名もふくまれている。この時代は叛乱が多数発生した世紀で蒙古の侵略により反蒙闘争がおこなわれた時代でもあった。

以下において「叛逆者」と云われた人々が生きた当時の社会の葛藤と矛盾構造を分析し，何故に人々が「叛逆」に立ち上がったのか，各人物についてその特色を考察検討することにする。その前に，第23代高宗王代から第24代元宗王代までの所謂「叛乱の世紀」と「反蒙闘争」について概観し，高宗王から元宗王時代の特色を考察することにする。

1．叛乱の世紀と反蒙闘争

1170年（毅宗24）８月に鄭仲夫，李義方ら武臣の反乱が勃発し多くの文臣を殺害追放した。この反乱は所謂庚寅の乱である。九月に鄭仲夫等は毅宗を廃して王弟の明宗を擁立し一挙に政権を獲得した。以後，約100年間武臣政権が続く。その武臣政権の後継者は鄭仲夫，李義方，慶大升，李義旼，崔忠献，崔瑀（怡），崔沆，崔竑（崔氏武人政権），金仁俊，林衍，林惟茂などの武臣執権者であった。この100年間の７国王のうち「廃位された者４人，擁立された者４人で，武臣による廃位に直接関係がない国王はわずか１人であった」[1]。武臣執権者は国王の廃位や擁立を左右できるようになり「恣意的に政治を動かす権力を握ったのである」[2]。では，何故に武臣自身が一気に王位につかなかったのであろうか。

それは「国王の廃立は可能でも，王位の簒奪はかえって武臣政権の存在を危くするもの」であったからである[3)]。

さて，武臣政権100年間の時代は王京内外での叛乱の時代であり所謂「叛乱の世紀」といわれ，次の四期に区分されている[4)]。その主なものをあげれば次の通りである。

第一期1173年（明宗３年）（武臣政権登場の３年後）より開始

(イ) 1173年８月東北面兵馬使金甫当の叛乱。
　　国王廃位と武臣政権打倒が名目。

(ロ) 1174年９月西京（平壌）留守の趙位寵の叛乱。鄭仲夫政権打倒が名目。これに呼応して北方で農民蜂起。

(ハ) 1176年正月公州鳴鶴所民の亡伊と亡所伊らが兵馬使を自称して蜂起。７月趙位寵の乱鎮圧。

(ニ) これ以後各地で叛乱相次ぐ。

第二期1190年（明宗20年）以後

(イ) 1190年（明宗20年）正月慶州で民乱。

(ロ) 1194年（明宗24年）２月金沙彌と孝心，雲門と草田で叛乱。

(ハ) 1196年（明宗26年）４月将軍崔忠献，李義旼を殺し，崔氏武臣政権樹立。

(ニ) 1198年（神宗元年）５月開城で崔忠献の私奴万積の乱。奴婢解放を主張。

(ホ) 1199年（神宗２年）２月江陵・慶州で民乱。

(ヘ) 1200年（神宗３年）４月晋州吏鄭方義の乱。５月密城の官奴，雲門の農民軍に投帰。

(ト) 1202年（神宗５年）12月雲門・蔚珍等の農民が慶州軍と合流し官軍を打破。

第三期1217年（高宗４年）以後

(イ) 1217年（高宗４年）５月西京（平壌）で崔光秀らの叛乱。

(ロ) 1219年（高宗６年）９月崔忠献が死に子の瑀が大権を掌握（執権）。10月義州の戍卒韓恂・多智の乱。

(ハ) 1232年（高宗19年）６月蒙古の兵患を避けて開城から江華に遷都。江華城着工，江都とする。

(ニ) 1233年（高宗20年）６月西京人畢賢甫・洪福源等叛乱。12月崔瑀，家兵を送って鎮圧。洪福源遼陽に逃げる。

第四期1257年（高宗44年）以後

(イ) 1257年（高宗44年）４月原州で安悦等叛乱平定される。閏４月崔沆が死に崔誼が後嗣となる。

(ロ) 1258年（高宗45年）３月柳璥・金俊等崔誼を殺し崔氏政権崩壊する。王政復古なる。12月趙暉・卓青等が和州（永興）以北（鉄嶺）を持って蒙古に投降する。蒙古は永興に双城総管府を設置する。暉を総管，青を千戸となす。

(ハ) 1259年（高宗46年）４月太子倎（後の元宗），講和交渉のため蒙古に行き，降伏の意思を伝える。６月高宗死亡。

(ニ) 1260年（元宗元年）４月元宗即位。

(ホ) 1270年（元宗11年）２月林衍死亡。息子の林惟茂が執権。蒙古慈悲嶺以北を占領。西京に東寧府を設置する。５月衍の子，惟茂謀反を起こし処刑。武臣の執権終わる。開城に復都する。６月将軍裴仲孫等三別抄の乱おこす。８月三別抄珍島に移動する。

(ヘ) 1271年（元宗12年）５月高麗政府軍金方慶は蒙古軍とともに珍島を陥落させ，推戴された承化侯温死ぬ。三別抄の余党，金通精に率いられて耽羅（済州島）に移動する。

以上，武臣政権下で王京内外でおこった叛乱の主なものをあげたが「総計八〇件」にも達する叛乱があったと云われる。武臣政権はこれらの叛乱を徹底鎮圧したのである。叛乱軍は国家権力や武臣政権そ

して外敵の蒙古の侵略とも抗戦せねばならなかった。叛乱軍の一部は蒙古側に投降した者もいた。武臣政権は蒙古抗戦の態度を堅持していたし三別抄の叛乱は「反蒙闘争」の性格をもっていたといえよう。

以下において第21代熙宗王代から第25代忠烈王代までに生きて叛逆者となった立伝人物16名について分析検討してその特色を解明することにする。この立伝人物16名は「叛乱の世紀」と「反蒙闘争」の時代を生きた人々である。

2.『高麗史』列伝「叛逆」㈣

(i) 立伝人物史料

前述したように列伝第四十三「叛逆伝」㈣には立伝人物16名があげられている。第21代熙宗王代から第25代忠烈王代の時期は武臣政権とモンゴルの支配期に該当する。この時代は叛乱が多数発生した世紀で蒙古の侵略により反蒙闘争がおこなわれた時でもあった。叛乱軍は国家権力や武臣政権そして外敵の蒙古の侵略とも抗戦せねばならなかった。

以下において「叛逆者」と云われた人々が生きた当時の社会の葛藤と矛盾構造を分析し，何故に「叛逆」に立ち上がったのか，各人物についてその特色を考察検討することにする。

(1) 韓恂（？～1220）（高宗７）

韓恂（かんじゅん）は本と義州の戍卒より起って副将となった人物である。高宗６年（1219）に郎将の多智（たち）とともに叛し，防戍将軍を殺し自ら元帥となって北界の諸城を陥落させ監倉使及び台官を署置して国倉を開き，諸城皆響応させた人物である。最後は金の元帥亐哥下（ウゲハ）に誘殺され首を京に送られた。「叛逆伝」によってその顛末をみて寸評を加えることにする。その伝記は凡そ，次のようである[5]。

（史料１）

本と義州の戍卒（じゅそつ）（辺境を守る兵卒）より起りて副將と爲る。高宗六年（1219）郎將多智と與に叛し，其の防戍將軍を殺し，自ら元帥と爲り，署して（役わりを決めて官職に任じる）監倉使及び臺官を置き，擅（ほしいまま）に國倉を發（ひら）く。諸城皆響應す。王三軍に命じて之を討たしむ。明年恂・智等清川江を以て界と爲して東眞（金の反乱貴族，蒲鮮萬奴が立てた国家）に投じ，潛に金の元帥亐哥下を引て義州に屯せしめ，自ら諸城の兵を領して博州に屯し，相い（ともに）聲援（声をかけて応援する）を爲す。中軍知兵馬事金君綏宜撫使李公老と議し，書を亐哥下に遣りて其の違命を責む。亐哥下竟（つい）に恂・智を誘殺し，移牒（ちょう）（文書を他の役所へまわすこと）して首を函（かん）して（入れて）京に送る。

武臣・叛逆者韓恂について①叛逆時の王名と年代は高宗６年（1219）である。①出自と官職は義州の戍卒より起こり副将となっている。③王朝の待遇は不明であるが不満であろう。④動機は官吏に対する不満で郎将の多智と共に防戍将軍を殺し，国倉を開いて民に与えている。⑤参加者は自ら元帥となって監倉使及び台官を署置しておる。王は三軍（全軍）に命じて討たしめており，多数の人々であろう。⑥解明端緒と結末は防戍将軍を郎将の多智とともに殺しており，王は三軍に命じてこれを討たしめている。結末は金の元帥亐哥下に誘殺され首は京に送られている。

武臣・叛逆者韓恂について寸評すれば防戍将軍を殺し国倉を開いて民衆に与えている。金の元帥亐哥下により多智とともに誘殺され首を京に送られていた人物であった。

(2) 多智（？～1220）（高宗７）

多智（たち）は元と義州の戍卒で郎将に進んだ人物である。彼は高宗６年（1219）に別将韓恂とともに防戍将軍趙宣及び其の守李棣（てい）を殺して叛し，自ら元帥と称して，諸城を響応させた人物である。北界の諸城を多くせめおとしている。最後は韓恂とともに金の元帥亐哥下に誘殺されている。「叛逆伝」によってその顛末をみて寸評を加えることにする。その伝記は大略，次のようである[6]。

（史料２）

元と義州の戍卒なり。郎將に進む。高麗高宗六年（1219）別將韓恂と共に防戍將軍趙宣及び其の守李棣を殺して叛し，自ら元帥と稱し，諸城響應（人の言動に応じて，すぐに行動を起こす）す。北界の諸城多く恂・智の陷（おとしい）るる所となる。翌年金の元帥亐哥（ウゲハ）下を引て義州に屯せしめ，自ら諸城の兵を領して（統べて）博川に屯せしが，遂に亐哥下の誘殺する所となる。詳くは恂の傳を參照のこと。

武臣・叛逆者多智について①叛逆時の王名と年代は高宗６年（1219）である。②出自と官職は義州の戍卒より郎将に進んでいる。③王朝の待遇は不明であるが不満であろう。④動機は韓恂と同じであろう。⑤参加者は自ら元帥と称して韓恂と同一行動をしている。多数の人々であろう。⑥解明端緒と結末は防戍将軍趙宣や其の守李棣を殺しており，王は三軍に命じてこれを討たしめている。結末は翌年金の元帥亐哥下に誘殺されている。

武臣・叛逆者多智について寸評すれば前述の韓恂と同一行動をとっており，金の元帥亐哥下に誘殺された人物であった。

⑶　洪福源（1206～1258）（熙宗２～高宗45）

洪福源（こうふくげん）は高宗時代の逆臣，附元輩である。初名は福良で本と唐城（南陽）の人である。父大純は高宗５年（1218）に麟州の都領となった。元は哈真（カジン）（蒙将）・扎（ジャ）（札）剌（ラ）（副蒙将）を遣って契丹の兵を江東城に攻めた。大純はその時迎えて降った。18年（1231）に撒礼塔（サリタ）（蒙将）は大挙して侵入し，福源も又迎えて軍に降った。20年（1233）に福源は西京（平壌）の郎将となり，畢賢甫とともに宣慰使大将軍鄭毅・朴禄全を殺し，城にたてこもり反乱をおこした人物である。「叛逆伝」によってその顛末をみて寸評を加えることにする。その伝記は凡そ，次のようである[7)]。

（史料３）

初名福良。本と唐城の人。其の先徙りて麟州に居る。父大純麟州の都領と爲る。高麗高宗五年（1218）元は哈眞・扎剌を遣りて契丹の兵を江東城に攻む。大純迎え降る。十八年撤禮塔大擧して入侵す。福源又迎えて軍に降る。二十年福源西京郎將と爲り，畢賢甫と與に宣慰使大將軍鄭毅・朴祿全を殺し，城に據（よ）りて反す。崔怡家兵三千を遣り，北界兵馬使閔曦と之を討ち，賢甫を獲て京に送り，市に腰斬す。福源逃れて元に入る。是において其の父大純及び女子弟百壽を擒（とりこ）にし，悉く餘民を海島に徙（うつ）す。西京遂に丘墟と爲る。福源元に在りて東京摠管と爲り，高麗の軍民を領し，凡そ降附せる四十餘城の民は皆之に屬す。本國を讒構（ざんこう）（悪いことを言って無実の罪をつくりあげる）し，兵に隨いて往來す。崔怡之を患い，其の心を悅ばしめんと欲し，大純を官して大將軍と爲す。百壽時に僧となる。之を髮して郎將と爲し，張暐は福源の女婿たるを以て賄賂して絶えず。福源之に感じて讒構（ざんこう）稍々弛む。然れども是より元兵歲に至り州郡を攻陷す。皆福源之を導くなり。三十七年元大純を徵して入朝せしむ。永寧公綧の入りて元に質たるや福源の家に寓す。福源之を待すること甚だ厚し。久うして乃ち釁（きん）（仲たがい）を生じ，綧不平を積む。福源密に巫をして木偶人を作らしめ，手を縛し頭に釘して地に埋め，或は井に沈めて咒詛（じゅそ）（のろう）す。校尉李綢嘗て逃れて元に入り綧に依る。覘（うかが）いて之を知り以て奏す。帝使を遣りて之を驗（あかし）せしむ。福源の曰く，兒子瘧（おこり・マラリヤ）を病む，故に用いて之を壓するのみ，他有るにあらざるなりと。因りて綧に謂て曰く，公恩を我に受くること久し，何ぞ反て讒（ざん）賊（わるもの）をして我を陷（おとしい）れしむるや，所謂養う所の犬反て主を噬（か）むなりと。綧の妻は蒙古の女なり。其の語聲甚だ厲（れい）（はげしい）にして不遜なるを聞き，譯者を呼んで具に問い，大に怒呵（どか）（はげしい声でしかる）し，福源を前に伏せしめ切責して曰く，汝爾の國に在りて何等の人なりやと。曰く邊城の人と。又問う我が公は何等の人たりやと。曰く王族と。然らば則ち眞に乃ち主なり，汝は實に犬たり，反て公を以て犬と爲

し，主を噬むと爲すは何ぞや。我は皇族なり，帝公が高麗の王族たるを以て之に嫁す，妾是を以て朝夕恪勤（職務を忠実に勤める）して貳心（ふたごころ）無し，公若し犬ならば安ぞ人にして犬と同處する者有らんや，吾當に帝に奏すべしと。遂に帝所に詣る。福源號泣叩頭して罪を乞う。綧追いて之を止めしが及ばず。福源產を傾け賄貨（まいない）を備え，綧と與に倍道（倍の道のりを行く）して之を追う。中途勅使に遇う。勅使卽ち壯士數十人をして福源を蹴殺せしめ，家產を籍沒し，其の妻及び子茶丘・君祥を械して以て歸る。福源の諸子父の死を憾み，本國を陷れんと謀りて爲さざる所無し。

逆臣洪福源について①叛逆時の王名と年代は高宗20年（1233）である。②出自と官職は高宗20年に西京の郎将となっている。父は麟州都領であった。福源はその後，元にのがれ東京総管となった。③王朝の待遇は不明であるが附元輩と云われるように元側につき，州郡攻略するのに手助けをしている。それ故，不満であろう。④動機は高宗18年に撒礼塔が大挙して入侵した時，迎えて降っている。父も高宗5年に降っている。⑤参加者は崔怡が家兵三千を遣り，北界兵馬使閔曦とこれを討ち，賢甫はとらえられ京に送られ市で腰斬されている。福源は逃れて元側に入っている。多数の人々が参加していたと思われる。⑥解明端緒と結末は洪福源は高宗20年に西京の郎将となり，畢賢甫とともに城にたてこもり叛乱をおこし宣慰使大将軍鄭毅と朴禄全を殺している。崔怡は家兵三千を遣りそれを討っている。父大純一族はとりこにされ余民も悉く海島に移され「西京は遂に丘墟と為る」といわれる状態であった。後，崔怡は大純一族に官職を与えて福源を悦ばせようとしている。一方，永寧公綧は元に人質となり福源の家に寓していた。二人は仲たがいとなり綧は不平を積んだ。結末は「壯士数十人をして福源を蹴殺せしめ，家産を籍没し，其の妻及び子茶丘・君祥を械して以て帰」っていった。

顛末寸評をすれば洪福源は附元輩といわれた人物で元側につき東京総管となっていた。永寧公綧が元側に人質となり福源の家に寓して仲たがいが生じ，結果として壯士数十人に蹴殺されてしまった人物といえよう。

⑷　李峴（？～1254）（高宗41）

李峴は高宗時代の逆臣である。性は貪婪で人を傷うを好んだ人物である。選軍別監となり多くの人から賂銀を受け，人々から「銀尚書」と言われた人物である。蒙古側につき将，也窟（古）の兵を先導して楊根・天竜の二城をせめて降しさらに忠州城を攻めたが下す能わず，ついに「叛逆を犯す，宜しく族を夷（ころ）すべし」と云われ，死刑となり其の家の財産は取りあげられた人物である。「叛逆伝」によってその顛末をみて寸評を加えることにする。その伝記は大略，次のようである[8]。

（史料４）

高麗高宗時の人。性貪婪（欲張り）人を傷うを好む。嘗て選軍別監と爲り，多く人の賂（まいない）銀を受く。人號して銀尚書と言う。官樞密副使に至り，蒙古に使し留めらるること二年。蒙古の將，也窟（古）の兵を先導して來り，降を諸城に諭し，楊根天竜二城を脅して之を降す。自ら其の達魯花赤（モンゴル元の各級官庁の長官）と爲り，二城の降民を率いて忠州城を攻むること七十餘日，遂に下す能わず。蒙古の兵還るに及び，隨い去るを得ずして乃ち來る。其の軍中獲る所の婦女財寶を悉く己が有と爲し，銀釵（かんざし）一笥（はこ）に滿つ。宰樞會議して曰く，峴宰相を以て叛逆を犯す，宜しく族を夷すべしと。是において棄市（死刑）して其家を籍す（罪人の財産を取り上げる）。其の子之瑞・之松・之壽・之栢・永年等は海に沉められ，妻及び姉妹女婿等は並に島に流さる。

逆臣李峴について，①叛逆時の王名と年代は高宗39年に蒙古に使行し２年留まった。その後，高宗41年（1254）に蒙古の将，也窟の兵を先導して諸城を降している。②出自と官職は先ず出自は不明であるが官職は選軍別監となっており，高宗39年には枢密院副使として蒙古に使行している。③王朝の

待遇は官は枢密院副使に至っているので良いとみられる。④動機は蒙古側につき忠州城等を攻めて失敗している。彼は叛逆を犯したとみられた。⑤参加者は二城の降民と共に忠州城を攻めている。⑥解明端緒と結末は忠州城を攻めて失敗し蒙古に帰れず「峴宰相を以て叛逆を犯す。宜しく族を夷すべし」と云われ棄市籍没されその子は海に沈められ，女子は島流しにされている。

顛末寸評は李峴は蒙古の侵略の先導となり忠州城を攻めて失敗した。叛逆を犯したとされて死刑になり，子供は海に沈められ女子は島流しとなってその家を籍没された人物であった。

⑸　趙叔昌（？～1234）（高宗21）

武臣・叛逆者趙叔昌は平章事冲の子で横城の人である。高宗10年（1231）に防戍将軍として咸新鎮（義州）にいた。蒙古の元帥撒礼塔が侵入した時，出てこれに降った人物である。「叛逆伝」によってその顛末をみて寸評を加えることにする。その伝記は凡そ，次のようである[9]。

（史料５）

高麗の平章事冲の子なり。高宗十八年（1231）防戍將軍を以て咸新鎮に在り。蒙古元帥撒禮塔來り侵すや，出て之に降り，蒙古人に謂て曰く，我は元帥趙冲の子なり。吾父曾て貴國元帥と約して兄弟の國と爲ると。書を爲りて朔州宣德鎮使に諭して迎え降らしむ。蒙兵の之く所叔昌をして先ず呼ばしめて曰う。眞に蒙古兵なり。宜しく亟に出て降るべしと，後ち官上將軍に至り，畢賢甫（？～1233）の叛に辭連りて（連座して）市に斬らる。畢賢（玄）甫は高宗二十年（1233）郎將となり洪福源等と西京で反亂，捕えられ京に送られ市で腰斬さる。

武臣・叛逆者趙叔昌について①叛逆時の王名と年代は高宗21年（1234）に西京の畢賢甫の乱につらなり市で斬られている。②出自と官職は平章事冲の子で横城の人である。防戍将軍から上将軍となっている。③王朝の待遇は不明であるが上将軍となっており良いとみられる。④動機は蒙古に降っており理由は不明であるが西京の畢賢甫の乱につらなり市斬されている。⑤参加者は不明であるが多数であろう。⑥解明端緒と結末は蒙古側についたが畢賢甫の乱につらなり市斬されていた。

顛末寸評は武臣・叛逆者趙叔昌は官は上将軍になったが西京の畢賢甫の乱につらなりあえなく市斬された人物であった。

⑹　趙暉（生没年未詳）（高宗代の人）

叛逆者趙暉は本と漢陽の人である。後ち移って竜津県にいた。高宗45年（1258）に蒙古兵が至った時，暉は定州の人卓青等と謀り，蒙古兵を引き虚に乗じて執平及び登州和州の副使並びに京別抄等を殺して和州以北（鉄嶺）を蒙古に附した人物である。「叛逆伝」によってその顛末をみて寸評を加えることにする。その伝記は大略，次のようである[10]。

（史料６）

本と漢陽の人なり。後ち徙りて竜津縣に居る。高麗高宗四十五年（1258）蒙古の兵大に至り，高・和・定・長・宜・文等十五州の人，入りて猪島（黄海道安岳郡）を保つ。東北面兵馬使愼執平，猪島城大にして人少なく守り難きを以て，遂に十五州の人を驅りて（おいたてて）竹島（宣川郡）に徙る。島狹隘（せまくて窮屈）にして井泉無く，人皆行くを欲せず。多く逃散し，入る者十に二三。糧儲（食糧をたくわえる））の乏少（とぼしい）を以て執平別抄を分遣して粟（穀物）を朝に請い，他道に漕運を催し，守備稍懈る。暉定州の人卓青等及び諸城の人と謀り，蒙古兵を引き虚に乘じて執平及び登州和州の副使並に京別抄等を殺し，和州以北を以て蒙古に附す。蒙古乃ち雙城摠管府を和州に置き，暉を以て摠管と爲し青を千戸（武官職の一つ。高麗人で最初の任名）と爲す。此において和州以北元の有に歸す。子良琪亦摠官を襲ぐ。

叛逆者趙暉について①叛逆時の王名と年代は高宗45年（1258）である。②出自と官職は本と漢陽の人である。蒙古が和州雙城総管府を置いた時，暉は総管となっている。子の良琪も亦総管を襲いでい

る。③王朝の待遇は蒙古兵が至った時期で良くなかった。④動機は蒙古兵の侵入により島に移ったことであろう。食糧不足がつづき，和州以北（鉄嶺）を蒙古に附している。⑤参加者は「定州の人卓青等及び諸城の人と謀」っている。多数である。⑥解明端緒と結末は蒙古兵を引き虚に乗じて執平及び登州和州の副使並びに京別抄等を殺し，和州以北（鉄嶺）を以て蒙古に附している。結末は雙城総管府が和州に置かれた時，暉は総管に任命されている。

顛末寸評は蒙古側につき総管となり和州以北（鉄嶺）を元の有に帰せしめた人物である。

⑺　金俊（？～1268）（元宗９）

武臣・権臣金俊は初名を仁俊と云った。父を允成と云う。父は本と賤隷（めしつかい）で，其の主人に背き，崔忠献に投じて奴となり，俊及び承俊を生んだ。俊は容貌は大きくてたくましかった。性格は寛厚でうやうやしくて人にへりくだり，射を善くした。施与を好み，遊侠子弟と群飲し生業をかえりみない人で善く衆心を得た人物であった。崔怡から信任され殿前承旨を授けられた。その後，その子の崔竑にうとんぜられ殺害して４代つづいた武臣政権をたおし王政復古をはたした。その功により将軍となり衛社功臣２等を賜り右副承宣となった。元宗元年（1260）１等功臣に改められ侍中となり，後に海陽侯となった。その後，1268年に林衍と権力争いでなかたがいをして殺害されてしまう。「叛逆伝」によってその顛末をみて寸評を加えることにする。その伝記は凡そ，次のようである[11)]。

（史料７）

初名仁俊。父を允成と云う。本と賤隷（めしつかい）なり。其主に背き，崔忠獻に投じて奴と爲り，俊及び承俊を生む。俊狀貌（顔かたち）魁岸（大きくてたくましい），性寛厚（心が大きくて親切），恭謙（うやうやしくてへりくだる）人に下り，射を善くす。又施與（ほどこし）を好み，日に遊侠子弟と群飲し，產業（なりわい）を顧みず。之を以て善く衆心を得たり。術僧（陰陽・卜筮の占術に精通した僧）有り之を見て曰く，此人後必ず國權を取らんと。朴松庇・宋吉儒等之を崔怡に推譽す。怡遂に親信し，出入毎に必ず俊をして扶持（手助けする）せしめ，殿前承旨を授く。俊，怡の嬖妾安心に通じ，固城に配せられしが，數年にして還る。怡，沆を召して其の後と爲すや，俊與りて力有り。沆權を襲ぐに及び，權を別將に補し，益親近す。沆死するや，竑年少暗劣（事にくらくおろかなこと）にして賢能を禮せず，專ら柳能・崔良伯の輩を親近し，俊を疎んず。俊密に不平を懐く。時に宋吉儒水路防護別監を以て出て慶尙道に在り。民を驅使すること殘虐を極め，且つ土田財物等を侵奪せしを以て，按察使の劾を被り（弾劾される），事將に危うからんとす。俊之を營救（手段を設けて人のこまっているのを救う）せんとし，大司成柳璥等と計りて陰に堂吏に命じて，稟（役人の俸給・扶持）するを停む。竑之を知り，怒りて吉儒を楸子島に流し，璥・俊等を罵りて其の專擅（ほしいままにする）を責め，之と相見ず。此において俊益疑貳（疑ってそむきはなれる）を懐く。神義軍都領朴希實・指諭郎將李延紹密に璥・俊等に謂て曰く，竑群小（多くのつまらない者ども）を親近し，讒を信じ且つ忌む所多し。早く之が計を爲さざれば，吾曹恐らくは亦た免かれじと。遂に計を定め，四月八日觀燈の夕を以て將に事を擧げんとす。俊の子大材之を其の妻の父崔良伯に漏す。良伯佯り應じ，之を竑に告ぐ。竑急に柳能を召して計を議す。時に日已に暮る。能の曰く，暮夜（夜分）能く爲すなし，先ず書を以て夜別抄指諭韓宗軌に諭し，遲明（夜あけがた）兵を發して俊を討たしむるも亦晩しとせずと。竑之を然りとす。大材の妻側に在りて之を聞き，以て大材に告ぐ。大材直に俊に告げて曰く，事急なり，早く之を圖るに如かずと。俊卽ち子弟を率い，神義軍に趨きて希實・延紹に會し，事已に漏れたり猶予すべからずと，急に其黨與（同じ仲間）を召集し，又指諭徐均漢等を招き，三別抄を射廳に會せしめ，人をして道に呼ばしめて曰く，令公死せりと。聞く者皆集る。璥・松庇等亦至る。俊曰く，此の如き大事王者無からるべからず。當に大臣の威望（おごそかで，人から尊敬されること）有るも

のを推すべしと。即ち樞密使崔昷を邀え，又上將軍朴成梓を招きて共に事を議す。俊，竑の門卒をして更籌（夜の時刻をはかるかずとり）を報ぜざらしめ，隊伍を廣場に分ち，松明を焚きて明晝の如く，衆人呼噪（さけびさわぐ）す。時適ま大霧にして竑の家兵一人の知る者無し。黎明（明けがた）夜別抄竑の家壁を破りて入り，終に竑を索（さがす）めて之を殺す。此において俊・璥及び昷等闕（天子のいるところ・宮城）に至り，王に謁して大政（天下の政治）を復す。俊進んで曰く，竑生民を恤まず，餓死を坐視して賑貸（施し貸す）せず。臣等忍びず義を擧げて之を誅せり。請う其の粟を發して饑民を賑恤（施しめぐむ）し，以て人望を慰めんと。即ち竑の倉穀を發して（開いて）之を分賜し，諸王宰樞文武百官より，胥吏軍卒皀隷（めし使い）坊里の人に至るまで，少きも三斛を下らず。又布帛（もめんと絹）馬匹等を分ち，使を慶尙全羅に遣り，悉く崔氏の奴婢田莊銀帛米穀を籍沒す。時に高宗四十五年三月なり。王功を論じて將軍を授け，衞社功臣の號を賜い，勳を策して第二と爲す。尋で右副承宣を拜す。初め權施なる者有り，怡の妓妾の女を娶り之に緣りて僕射を拜し，其の子守均も亦將軍と爲り，守均の女壻文璜亦少鄕を拜せしが，施の父子事を以て寵められ，竑又誅せらるるに及び，璜居常（平生）怏怏（心に満足しないざま）として樂まず，俊を殺し，竑の爲に仇を報ぜんと欲し，其の子光旦・英旦及び隊正崔注等と密に議して事を擧げんとせしが，事露われて皆俊の殺す處と爲る。元宗元年（1260）改めて衞社の功を策し，俊を以て第一と爲す。樞密院副使御史大夫柱國太子賓客翼陽郡開國伯に進み，四年守大尉參知政事判御史臺事太子少師に陞る。翌年王將に蒙古に朝せんとするや，王の爲に百高座を大觀殿に設け仁王經（この経を護持するときは，七難起らず，災害生ぜず，万民豊楽であるという）を講ず。王，俊に忠誠の心ありと爲し，從者に爵を賜うこと差あり。又命じて校定別監と爲し，國家の非違（法にそむく違法）を糾察（罪を取り調べる）せしめ，入朝の後國事を監せしむ。既にして王國に還り，將に封侯立府せんとし，制を下して殊典（特別の儀式）を議せしめ，遂に侍中に拜し，尋で册して海陽侯と爲す。一に崔忠獻の故事に依る。俊既に國に當り，專權威福を恣にし，其徒亦勢に倚りて侵漁（他人のものを侵し取る）し，橫暴至らざる所無し。王之を忌む。九年蒙古，使を遣り俊の父子及び其弟冲を徵して入朝せしむ。俊，將軍車松佑の言に依り，其使を殺して蒙古と絕ち，深く海中に竄入（にげこむ）せんとし，再び之を王に請いしが王聽さず。松佑に謂て曰く，上固く拒む，之を奈何せんと。松佑等曰く，竜孫は但だ今上のみにあらず，諸王固と多し，況んや太祖將軍を以て事を擧ぐ，何の疑慮（うたがいの心）する所あらんと。俊之を然りとし，終に不軌（反乱をはかる）を懷き，謀を決して使を殺さんとし，都兵馬錄事嚴守安をして之を弟冲に告げしむ。時に冲適ま疾みて家に在り。守安往きて之を告げ，且其の不可を極言す。冲素と守安と善し。其の言を然りとし，遂に其の謀を沮止す。然れども俊益蒙古の命を拒み，其の入朝を責めんことを恐れ，大に五教の沙門を其家に會して冥福を祈る。初め俊の子承宜皚の家奴，竜山別監李碩と憾有り。碩が內繕二艘を載せて江岸に泊すと聞き，之を皚に訴う。皚之を俊に告げ，夜別抄を遣り奪いて其の家に入れ，夜別抄に分與す。未だ幾ならず俊，王に見ゆ。王，碩上る所の膳狀を出して之を示す。俊色を變じて退き，還收して以て獻ず。王之を卻けて曰く，既に奪いて復た獻ず，義において可ならんや。是皆寡人祭醮（祭りをすること）の用，碩久しく稽めて進めず，俊に奪わる。是れ碩の罪なりと。之を島に流し，內侍權仁紀を以て之に代え，尋で之を召還す。是より王益俊を惡む。俊常に自ら言う，嘗て權臣を誅し，畜積（たくわえる）を發して民生を救うこと多し，假令市街に臥すといえども誰か我を害せんと。是より人の惡言を聞くも以て意となさず。農莊を列置し，家臣文成柱をして全羅を管せしめ，池濬をして忠淸を管せしむ。二人爭いて聚斂（きびしく租税を取りたてる）を事とし，民に稻種一斗を給し，米一碩を例收す。諸子亦之に效い，無賴の徒を聚め，勢を賴みて橫行し，人の土田を侵奪し，怨聲甚だ多し。俊嘗て王を其の家に邀えんと欲し，鄰

家を撤して以て其家を廣め，窮冬盛夏晝夜役を督す。屋高さ數丈，庭の廣さ百歩。其の妻尙お之を嫌いて曰く，丈夫の眼孔亦何ぞ爾（かくのごと）く小なるやと。宅主に封ぜらるるに及び，入りて宮主に見ゆるに其の上に拜す。俊既に侯に封ぜられ，宗室に效い右に笏を奉ず。每（つね）に曰く，平生未だ慣れざる所と。時有りて左に奉ず。人見て之を譏（そし）る。時に淫巫（いんぶ）（みだらなるみこ）有り鷂（よう）（はしたか）房と號す。常に俊の家に出入す。俊其の言に惑い，國家の事皆吉凶を占う。時人之を鷂夫人と稱す。俊蒙古の使至る每に之を迎待せず。使若し徵詰すれば輒ち之を殺さんことを言う。樞密副使林衍初め隊正たりし時，人の妻を姦（おか）し，有司其罪を治せんとす。俊之を救い，且つ薦（すす）めて郎將となす。之を以て，衍常に俊を呼んで父と爲す。俊と與に竝を誅し，衞社功臣を授けられ累遷して樞副に至る。衍嘗て俊の子と田を爭う。俊曰く，我在るに尙お爾（しか）り，況んや死後をや。吾何ぞ此人を視るに忍びんやと。又衍の妻其の奴を殺す。俊曰く，此婦性惡，當に遠流すべしと。衍之を聞き是より俊と隙（あらそい）あり。郎將康允紹なる者，善く蒙古の語を解し，姦黠（かんかつ）（わるがしこい）を以て王に寵有り。又衍と善し。王の俊を忌むを知り，又衍が俊と隙有るを知り，密に衍を激して俊を圖らしめんとし，屢王に衍の用うべきを言い，又其の俊を除くの意あるを云う。王曰く，然らば眞に忠臣なりと。一日衍宦者崔璁を促して速に王命を請わしむ。璁卽ち宦者金鏡と入りて奏す。王の曰く，果して若し俊を殺さば何の幸か之に如かんと。衍遂に大挺（たいてい）（つえ）を制し櫃（き）（へびの木・靈寿木）に盛りて予め宮中に置き，日を期して事を擧げんとす。會ま王出て蒙古の使を餞（はなむけ）（送別会）す。俊の黨皆扈從（こしょう）（随行）せず。故を以て發するを得ず。王事の泄れんことを恐れ終夜寢ねず。疾有りと宣言し，中使（内密の勅使）を分遣して神祠佛宇に禱らしむ。詰朝（きっちょう）（早朝）俊衙に赴かず。鏡等王命を以て俊を召す。俊急に朝堂に趨く。璁引て便殿の前に至り，人をして之を梃（てい）（つえで打つ）せしめ，遂に之を斬る。弟冲尋で至り，又其の殺す所と爲る。從者變を聞き入りて救わんとせしが，宦者金子廷門に當り王旨と稱して之を卻（しりぞ）けて曰く今俊の兄弟皆誅に伏す，汝等入內何を爲さんとするやと。推して之を出す。衍夜別抄を分遣し，俊の子及び其黨を捕えて之を殺し，大將軍崔暉・將軍車松佑等十餘人皆誅せられ，俊の妻は海島に流さる。家奴の誅せらる者擧げて數うべからず。

武臣・権臣金俊について①叛逆時の王名と年代は高宗45年（1258）である。②出自と官職は父は賤隷出身であった。その子である。殿前承旨，衞社功臣2等で右副承宣を賜わった。③王朝の待遇は金俊は崔氏武人政権を倒し王政復古をはたしており衞社功臣2等を賜わり良好であった。④動機は崔竝にうとんぜられたために彼を殺してしまう。4代続いた崔氏武人政権を倒している。⑤参加者は不明であるが多数の人々が参加したと考えられる。⑥解明端緒と結末は崔竝にうとんぜられたためであった。結末は功により衞社功臣2等を賜わっている。その後，林衍と権力争いをして殺害されている人物である。

謀叛顚末寸評は当時高麗は蒙古の侵略下にあり抗戦論を主張した金俊は降伏を考えていた王より寵を失っていった人物といえよう。尙，当時の全羅や忠清での農荘経営のあり方が判明する「民に稻種一斗を給し，米一碩を例收す」と云われる史料は重要である。

⑻　林衍（？～1270）（元宗11）

権臣林衍（りんえん）は凶悪な人相をしていたと云われる。進駐していた蒙古兵を追放して隊正に補せられている。衍は林孝侯の妻と通じ罪を問われたのを金俊に助けられた人物である。郎将となり金俊らと崔竝を誅し衞社功臣となり枢密副使となっている。その後，衍は金俊となかたがいとなり，彼を殺害した。林衍は王の廃位をはかり島流しを企てたが中止となった。元宗10年6月になり王は譲位して弟の安慶公湯が立ち王となった。時に7月世子（忠烈王）は燕京（蒙古）から帰国の途中，婆娑府（九連城）で変を聞き廃立の真相を知って引き返し世祖に奏上して助けを求めた。世祖は宗主国の承認なく廃立を行った事を問責して1269年11月に元宗を復位させた。林衍は蒙古の召喚命令を拒否し，夜別抄を諸道に遣り蒙古に備えしめたが日夜心配して苦しみ背に疽（しょ）（悪性のはれもの）を発して死んだ人物である。「叛

逆伝」によってその謀叛顛末をみて寸評を加えることにする。その伝記は凡そ，次のようである[12–1)]。

（史料８）

初名承柱。人と爲り蜂目犲聲（凶悪な人相のたとえ），輕捷（すばしっこい）にして力有り。能く倒身臂行す。初め隊正に補せらる。林孝侯なる者有り，衍の妻と通ず。衍之を知り，孝侯の妻を誘いて之と通ず。孝侯有司に告げ，有司衍の罪を治せん（犯罪を取り調べてさばく）とす。金俊其の勇を惜み，力救して免かるるを得たり。且つ薦めて郎將と爲す。衍之を德とし，常に俊を呼んで父と爲す。俊と與に權臣崔竑を誅し，政を王室に還し，功を以て衛社功臣に列せられ，樞密副使に累遷（官位が昇進する）す。金俊既に國政を秉り，威福（権力でおどしたり，恩恵をほどこしたりして手なずけること）を擅にするに及び，元宗之を忌む。時に衍，俊と隙有り。遂に金鏡，崔瑰等と謀りて俊を誅せしが，尋で鏡・瑰の勢威已に逼るを忌み，夜別抄を遣り，捕えて之を斬り，市に梟首（さらし首）し，又王の親信する所の張季烈・奇蘊等を流に處し，遂に擅に王を廢し，安慶公淐を立て王と爲す。時に世子（忠烈王）燕京より還りて婆娑府に至り，變を聞き痛哭して復た燕京に還る。此において元遣使して廢立の事を責め，又詔して王並に淐と衍を徵（めす）す。詔使黒的宜しく王位を復すべきを言う。衍已むを得ず宰樞を會し，議して淐を廢し，復た王を立つ。後ち王徵されて燕京に如くや，衍王が廢立の事を泄さん（除く）ことを恐れ，其の子維幹及び腹心をして王に扈從（随行）し，京師に至りて事を綱縫（とりつくろう）して奏せしむ。帝既に世子並に李藏用等に問いて其の實を知り，惟幹の言を斥けて妄言なりとし，其頸を繫ぎ，中書省に命じ，更に牒して衍を徵さしむ。衍命を拒まんと欲し，夜別抄を諸道に遣り，民を督して諸島に入らしめ，以て蒙古に備えしが，日夜憂懣（心配して苦しむ）し，疽（かさ・悪性のはれもの）背に發して死す。

権臣林衍について①叛逆時の王名と年代は元宗の廃位をはかり島流しを企てその中心となった。元宗10年（1269）６月に王は譲位して弟の安慶公淐を立て王とした。②出自と官職は母は州吏の娘である。隊正となったが金俊らと崔竑を誅し衛社功臣になりその後，枢密副使となっている。③王朝の待遇は衛社功臣になり枢密副使となっているので良好であろう。④動機は林衍は元宗の廃位を企て王を島流ししようとしていた。⑤参加者は不明であるが多数であろう。⑥解明端緒と結末は林衍は世祖から元宗の廃立を問責され復位させている。結末は背に疽を発して病死している。

謀叛顛末寸評は元宗の廃位は叛逆行為であるが林衍は蒙古の召喚命令を拒否し，夜別抄を諸道に遣り蒙古に備えしめている。彼の行為は一種の反元運動とも見なされよう。

⑼　林惟茂（？～1270）（元宗11）

武臣林惟茂は本貫は鎮州である。逆臣・権臣衍の子である。父に代り校定別監（教定別監）となり，兵権を執った。彼は蒙古の命を拒まんと反抗運動を続けたが宋松礼等に執えられ市に斬せられた人物であった。「叛逆伝」によってその謀叛顛末をみて寸評を加えることにする。その伝記は大略，次のようである[12–2)]。

（史料９）

高麗の逆臣衍の子なり。衍死するや，父に代りて校定別監となり，又兵權を執り，海島に據りて蒙古の命を拒まんとせしが，諸臣服せず。遂に直門下宋松禮等の爲に執らえられて市に斬せらる。其の母李氏・弟惟幹・惟柜・惟提等皆執らえられて蒙古に送らる。

武臣林惟茂について①叛逆時の王名と年代は元宗11年（1270）江華で教定別監となって実権を執り，蒙古の出陸命令を拒み反抗した。②出自と官職は林衍の子であり教定別監であった。③王朝の待遇は初めは父にかわり校定別監となっているが実権をにぎり元宗にうとまれたのであろう。④動機は蒙古の出陸命令をこばんだため宋松礼等に執らえられ市で斬せられている。⑤参加者は不明であるが多数であろ

う。⑥解明端緒と結末は林惟茂は蒙古の出陸命令を拒んで反抗運動を続けたためであろう。結末は元宗の命で宋松礼等に執らえられ市斬されている。

謀叛顛末寸評は母李氏，弟惟幹，惟柜，惟提等皆執らえられて蒙古に送られている。

⑽　趙彝（生没年未詳）（元宗代）

文臣・叛逆者趙彝は初名は蘭如，咸安の人で工曹典書をした悦の子である。還俗して進士となり，高麗に反いて元に行き，諸国の語を解するを以て帝所に出入した人物である。彼は常に人をそしりきずつけて志を得ずして死んだ。「叛逆伝」によってその謀叛顛末をみて寸評を加えることにする。その伝記は大略，次のようである[13-1)]。

（史料10）

初名蘭如，咸安の人なり。嘗て僧と爲り，歸俗して舉士の業（科挙の勉強）を學び，進士に中る。後ち高麗に反きて元に入り，能く諸國の語を解するを以て帝所に出入し，常に讒毀（人をそしりきずつける）を以て事と爲し，竟に志を得ずして死す。元，日本に遣使し，高麗をして嚮導（道案内）せしめしも，本と彝が高麗の常に日本と通交すと譖せし（いつわる）による。

文臣・叛逆者趙彝について①叛逆時の王名と年代は元宗代（1260～1274年）である。理由は不明であるが高麗に反いて元に入って帝所に出入していた。人をそしりきずつけて元が日本に遣使し高麗に道案内させたのも，彝が高麗を日本と通交させたといつわりを云ったためである。②出自と官職は僧で還俗して進士となり，元に入り帝所に出入した。官職は不明である。③王朝の待遇も不明である。④動機は不明である。⑤参加者も不明である。⑥解明端緒と結末は常に人をそしりきずつけて，志を得ずして死んだ人物である。

顛末寸評は彝が高麗は「常に日本と通交す」といつわりを云った人物である。

⑾　金裕（生没年未詳）（高宗代）

叛逆者金裕は文科に登第した人物である。高宗朝に永寧公綍が蒙古に質となるや随行した人物である。元の丞相安童に金裕は「海東三山薬物有り，若し我を遣れば之を得べし」といつわりを云って得難きものを求めて高麗を困らせようとした人物である。「叛逆伝」によってその顛末をみて寸評を加えることにする。その伝記は凡そ，次のようである[13-2)]。

（史料11）

高麗の反臣なり。文科に登第す。高宗の朝，永寧公綍入りて蒙古に質となるや，自ら請いて弓箭（ゆみや）陪卒（従歩兵）となり，隨い行きて遂に蒙古に附し，常に使を奉じて來り以て其の欲を逞うせんと欲す。元の丞相安童に說て曰く，海東三山藥物有り，若し我を遣れば之を得べしと。安童之を信じ，遂に裕及び申百川なる者を差わし，書を王に貽りて大嶺山香栢子六十斤，智靈洞全密四十斤，南海島失母松五十斤，金剛山石茸六十斤，大嶺山南榧子五十斤，松膏餅三十斤，觀音松上水，風眠松葉二百斤を求む。觀音松上水は本無き者なり。之を裕等に問えば洛山の上に在りと云う。王人を遣り裕等と與に之を採らしめんとせしが，裕等曰く，多く風眠松を得れば松上水は無きも亦妨げずと。便ち之を止む。所謂松膏餅は松白皮を取り，灰水に熟鍊（じゅうぶんに練る）して之を杵き，密汁粘粥（ねばっこいこごめ）を和して餅とせしものなり。裕等之を自ら松上に生ずと爲すは誣妄（いつわり）なり。蓋し裕等の意，此等得難き物を求めて以て高麗を困しめんとするに在り。王答書を遣りて其の誣妄を弁ぜり（明らかにする）。

反臣者金裕について①叛逆時の王名と年代は高宗代で1214～1259年の間である。②出自と官職は出自は不明で官職は文料に登第し，弓箭陪卒となっている。③王朝の待遇は不明であるが，永寧公綍に随行して蒙古に行っている。④動機は「常に使を奉じて來り以て其の欲をたくましうせんと欲す」とあり，物欲であろう。⑤参加者は不明である。⑥解明端緒と結末は海東（高麗）三山の薬物を求めて誑言

を言い，王が答書して誣妄（いつわり）を明らかにし，得難きものを求めて高麗を困苦させた罪で反臣とみなされた人物である。金裕の誑言は王が答書を遣ってその誣妄（いつわりしいる）を明らかにしたのである。

顛末寸評は「蓋し裕等の意，此等得難き物を求めて以て高麗を困しめんとするに在り」と云われるように誑言が反臣者とみなされたのであろう。

⑿　李枢（生没年未詳）（元宗代）

附元輩・叛逆者李枢は初名は唐古である。上将軍応公の子である。元に仕えて帝に奏請して元宗12年（1271）と13年に高麗に来て多くの産物を徴求して頗る累を及ぼした人物である。「叛逆伝」によってその顛末をみて寸評を加えることにする。その伝記は大略，次のようである[13-3)]。

（史料12）

初名唐古。高麗の上將軍應公の子。本國に反むきて元に仕え，帝に妄りに奏して本國所産の者にあらざるものを徴求（求める）し，頗る累（わざわい）を及ぼせり。又來りて大木を斫りて元に輸せり。

附元輩・叛逆者李枢について①叛逆時の王名と年代は元宗代で1260～1274年の間である。本国に反むいて元に仕えた人物である。元宗12年（1271）と同13年に高麗に来て，多くの産物を求めている。②出自と官職は上将軍應公の子である。本国に反むいて元に仕えたが官職は不明である。③王朝の待遇と④動機は不明である。⑤参加者は不明であるが，多くの人々が産物を求めたり，材木を切る等にかかわっていた。⑥解明端緒と結末は王が元に請い中止させており，高麗に頗る累を及ぼした附元輩・反臣者とみなされた人物である。

顛末寸評は「又来りて大木を斫りて元に輸せり」とあるように元側につき多くの産物を高麗に徴求して頗る累を及ぼしたことが叛逆者とみなされたのであろう。

⒀　韓洪甫（生没年未詳）（高宗代）

叛逆者韓洪甫は楹城（忠清道沔川郡）の人である。兄洪弼を怨み反して蒙古に入る。也速達（元人）は我が子の如く彼を愛した。我は本国に白金をあなぐらに蔵しているので取って来たいと也速達に申し出た。彼は許し二人で行かせた。洪甫は金郊駅（黄海道金川郡）で逃げてかくれてしまった。也速達は「請う捕え送れよ」と云った。時に洪甫は故郷に還って久しいので「別抄を遣りて追捕し，ついに也速達に送」られた人物である。「叛逆伝」によって顛末をみて寸評を加えることにする。その伝記は大略，次のようである[14)]。

（史料13）

楹城の人。嘗て其の兄洪弼を怨み反して蒙古に入る。也速達之を愛すること子の如し。一日也速達を紿て云う，吾れ本國に在りて白金を窖（あなぐら）藏し人之を知るなし，且つ吾兄家産頗る饒なり，聞く今已に死すと。請う往て兄の財及び吾藏銀を收めて來らんと。也速達之を許す。乃ち二人を遣りて伴い行かしむ。洪甫金郊驛に至り自ら計りて以爲らく，若し二人と偕に入京すれば，獨り留まるべからずと。二人に託語（伝言）して曰く，今吾れ冠を失えり，請う還りて之を尋ねんと。他人の鞍馬を取り草莽（くさむら）に匿れ，乃ち二人に後れて來り，朝に言て曰く，我の蒙古に投ぜるは吾兄の故を以てなり，本と國に背くにあらず，懐土（懐郷）の情に勝えず，以て來ると幾くも無く也速達牒して云う楹城の人韓洪甫投入すること已に年有り，向には本郡大井寺窖藏の銀物を取りて來らんと請う。我れ二人をして伴い行かしむ。金郊驛に至るに及んで逃竄（にげてかくれる）して還らず。兩國和好の約固からざる者は，實に此等姦人（心のよこしまな人）の語言（ことば）に由るなり，請う捕え送れよと。時に洪甫其の郷に還りて久し，別抄を遣りて追捕し，竟に也速達に送る。

叛逆者韓洪甫について①叛逆時の王名と年代は高宗代で1214～1259年の間である。②出自と官職は楹城の出身で，兄洪弼がいる。官職は不明であるが「投入すること已に年有り」と言われており，何らかの官職についていたと思われる。③王朝の待遇は不明である。④動機は「兄洪弼を怨み反して蒙古に入」り，也速達に子の如く寵愛された人物である。⑤参加者は不明であるが，別抄軍等が探索にかかわっていた。⑥解明端緒と結末は兄の死を聞き，故郷にある兄の遺産及び大井寺のあな蔵に隠した自分の銀物を取らんことを請い，逃げ帰っており，也速達は「実に此等は姦人の語言に由るなり」として，別抄軍に探索させて追捕し蒙古に送られた人物である。

顛末寸評は「我の蒙古に投ぜるは吾兄の故を以てなり，本と国に背くにあらず，懐土の情に勝えず，以て来る」と云う。結局，追捕され蒙古に送られた人物である。

⒁　于琔（？～1273）（元宗14）

叛逆者于琔（うてい）は鎮州（忠清北道鎮川郡）の人で，元宗朝（1260～1274）に訳官として郎将（州県軍におかれた正6品の武官）に累遷した人物である。于琔はかつて蒙古に使して留まって返らず。叛人衙内都兵馬録事陸子讓（襄）とともに帝に「聖旨を以て家属を取らんとす」と請い訴えたが「遂に応ぜず」とあり，聞き入れられなかった。また，白州の別監で叛人金守磾（てい）とともに于琔は也速達（イェスデル）の営にあって「高麗急有らば必ず済州（江華の誤りか）に遷らん。今都を旧京に復さんとするは実にあらざるなり」と訴えた。也速達は「之を信ず」とあり聞きとどけられた。折しも，太子典（後ちの元宗）は蒙古より東還する時で也速達の営に至っていた。也速達は守磾等と対弁させようと望んだ。太子は「何ぞ叛人の言を信ずるや」と云ったのを也速達は聞き，はじて太子典を遣還させてしまった。後ち琔は東還し，結局，元宗14年（1273）11月になり「于琔誅に伏す」とあり処刑された人物である。「叛逆伝」によってその顛末をみて寸評を加えることにする。その伝記は凡そ，次のようである[15]。

（史料14）

高麗の逆臣なり。鎭州の人。元宗の朝譯語を以て郎將に累遷す。嘗て蒙古に使し，因りて留りて返らず。叛人金守磾と俱に剃髪（ていはつ）（出家）し，也速達の營に在り。訴（うった）えて曰う，高麗急有らば必ず濟州（江華の誤りか）に遷らん，今都を舊京に復さんとするは實にあらざるなりと。也速達之を信ず。太子蒙古より還りて也速達の營に至るに及び，也速達琔等をして對弁（物事の是非を議論する）せしめんと欲す。太子の曰く，何ぞ叛人の言を信ぜん，吾寧ろ祝髪（断髪）し此に拘（とら）えらるるも，豈に叛人と與に弁ぜんやと。也速達愧（は）じて之を遣（けん）還す。後ち琔東還し，林惟梱の妻蔡氏を娶る。中書省以爲らく，朝廷嘗て督して林衍・惟梱の家屬（家族）を取りて京に赴かしむ。蔡氏朝命に遵（したが）わず，網（もう）を漏れて（幸いに罪をのがれる）獨り留る。而して琔之を娶るは罪之より大なるは無しと。遂に達魯花赤（ダルガチ）に移文して琔蔡氏を誅せしむ。琔の兄弟三人皆登科（科挙に合格する）し，其母國禀（りん）（俸禄）を例受せらるるに當り，有司議して曰く，凡そ三子登科する者の母に祿するは其の文章輔弼（ほひつ）（天子の政治を手助けする）を生むが爲めなり。今琔の母登第三子有りといえども，一は逆臣と爲る。宜しく祿を與うべからずと。遂に止む。

叛逆者于琔について①叛逆時の王名と年代は元宗元年（1260）蒙古に使行したが留まりて返らず。叛人金守磾（てい）と一緒に投降して剃髪し，也速達の営に留まっていた。②出自と官職は枢密院使仁撥の子である。訳語（官）を以て正六品武官の郎将となっている。③王朝の待遇は不明である。④動機は蒙古に使して叛人金守磾とともに剃髪し，也速達の営に留まっていろいろ訴えた。⑤参加者は不明で多数。⑥解明端緒と結末は于琔は「叛人金守磾と俱に剃髪し，也速達の営に在」っていろいろ訴え，太子典と対弁させられた。于琔は東還して結局，元宗14年（1273）に処刑されている。

顛末寸評は琔は東還後，林惟梱の妻蔡氏を娶った。蔡氏は朝命にしたがわず独り留まっていた。琔は「これを娶るは罪之より大なるはなし」と。達魯花赤に移文して琔は蔡氏を誅させている。尚，その後，

「両府議して于琁等の族類を放つ」とあり于琁等の家族は放免されている。

⒂　崔坦（生没年未詳）（元宗末～忠烈王代）

官吏・逆臣崔坦は西北面兵馬使営吏であった。元宗10年（1269）6月に林衍が元宗の廃立を企て安慶公湒（侃）を擁立した。10月に営吏韓慎・三和県人前校尉李延齡等と謀って林衍を誅することを名目として乱を起こした。坦は西京留守を殺し西北諸城の官吏を服従させて六十余城を携えて蒙古（元）の世祖に献じて投降した人物である。「叛逆伝」によってその顛末をみて寸評を加えることにする。その伝記は大略，次のようである[16)]。

（史料15）

本と西北面兵馬使營の吏なり。元宗十年（1269）林衍王を廢し安慶公湒を立つ。坦は營吏韓愼，三和縣人校尉李延齡等と與に衍を誅することを以て名と爲し，西京に據て反し，西北四十餘城を以て元に投ず。元東寧府を置き，慈悲嶺を畫して界と爲し，坦等を以て摠管と爲す。後ち二十二年にして元東寧府を罷めて（廃止）之を高麗に歸す。

元宗11年正月に蒙古兵は西京に来屯した。世祖は西京を東寧府と改号し崔坦を総管とし，達魯花赤を置いて慈悲嶺を以て境界とした。

林衍は殺され5月には衍の子の惟茂が叛乱を起こし誅されている。

降って忠烈王11年（1285）になると崔坦はかつての同志韓慎・延州人玄孝哲等と謀って郎将桂文庇の配下の者を捕えて彼等は宰相廉承益と謀って我等を殺さんとしたとして遼東宣慰使按察府に誣告した。宣慰使と忠烈王が調査した結果，虚構なる事が判明したので崔坦は罪に服することとなった。

官吏・叛逆者崔坦について①叛逆時の王名と年代は元宗10年（1269）林衍を誅する名目で乱を起こして，西京以下60余城を携えて蒙古（元）に投降した。②出自と官職は本と西北面兵馬使営吏（記官）であった。東寧府の総管となっている。③王朝の待遇は不明であるが林衍が元宗を廃立しようと企てていた時代で政情不安定な時期である。④動機は林衍の元宗廃立である。⑤参加者は不明であるが多数であろう。⑥解明端緒と結末は蒙古（元）の世祖に投降することにより蒙古兵が西京に来屯し，西京を東寧府と改号して崔坦は総管となった。降って，忠烈王11年（1285）に郎将桂文庇の配下の者が宰相廉承益と謀って我等を殺そうとしていると宣慰使に誣告したが虚構である事が判明して罪に服した人物である。

顛末寸評は崔坦は蒙古（元）側に投降して東寧府の総管となった人物だが蒙古はダルガチを置いて慈悲嶺以北を占領してしまったのである。

⒃　裴仲孫（？～1271）（元宗12）

元宗朝（1260～1274）に裴仲孫は官を累ねて将軍に至っている。1270年元宗は蒙古（元）に降服し，旧都開城にもどった。王は将軍金之氐を遣り，三別抄の解散を命じたが拒否した。6月三別抄は将軍裴仲孫・指諭盧永禧等を首領として叛し，承化侯温に迫って王となし，船艦を聚めて公私の財産及び子女を載せて南下し珍島に入った。そして，蒙古及び高麗政府に反抗した人物である。「叛逆伝」によりその顛末をみて寸評を加えることにする。その伝記は凡そ，次のようである[17)]。

（史料16）

高麗元宗の朝，官を累ねて將軍に至る。十一年（1270）高麗都を開城に復し，榜示して日を畫して趣して悉く還らしむ。三別抄軍異議を唱えて從わず。王，將軍金之氐を遣り，江華に入りて三別抄を罷め其名籍を取りて還らしむ。此において三別抄名籍（名簿）を以て蒙古に聞せん（もうしあげる）を恐れ，益反心を懷く。仲孫，夜別抄指諭盧永禧等と與に遂に亂を作し，人をして國中に呼ばわしめて曰く，蒙古兵大に至り人民を殺戮（ころす）せん。凡そ國を輔けんと欲する者は皆毬庭（撃毬をする広場）に會すべしと。須臾（少しのあいだ）にして國人大に會す。或は奔走四

散し，舟を爭いて江を渡らんとし，溺死する者多し。三別抄人の出入を禁じ，江を巡りて大に呼んで曰く凡そ兩班の舟に在りて下らざる者は悉く之を斬らんと。聞く者皆懼（おそ）れて下る。或は舟を發して開京に向わんと欲する者は賊小艇に乘じ追て之を射る。皆敢て動かず。城中の人驚駭（がい）（おどろきおそれる）し，散じて林藪（そう）に匿（かくれ）る賊金剛庫の兵器を發して軍卒に分與し，城に嬰（めぐらし）て固守す。仲孫・永禧三別抄を領して市廊に會し，承化侯溫に迫りて王と爲し，署して（役わりを決めて官職に任じる）官府を置き，大將軍劉存奕・尚書左丞李信孫を左右承宣と爲す。然れども士卒（兵士）の逃亡するもの相い續ぎ，仲孫等遂に守る能わざるを慮り，船艦を聚め，悉く公私の財產及び子女を載せて南下し，入りて珍島に據り，州郡を剽掠（ひょうりゃく）（おびやかしとる）す。王，金方慶に命じて往て之を討たしむ。翌年方慶蒙古の元帥忻都（きんと）等と與に擊て之を平ぐ。餘賊遁（のが）れて耽羅（たんら）に據りしが，尋（つい）で又其平ぐる所と爲る。

三別抄は珍島を本拠に南海の州郡を侵略した。元宗12年5月になって高麗政府軍金方慶は蒙古軍の元帥忻都等とともに珍島を攻陷して承化侯溫を斬った。賊将金精通は余衆を率いて耽羅島（済州島）に至り，反抗をつづけた。元宗14年（1273）2月金方慶を送り元将とともに耽羅を攻めて4月に済州城を陥し，前後4年にわたる大乱を平定した。

三別抄の指揮者・将軍裴仲孫について①叛逆時の王名と年代は元宗11年（1270）に承化侯溫を王として叛した。②出自と官職は出自は不明であるが元宗朝に官を累ねて将軍に至っている。③王朝の待遇は三別抄の解散を王から命じられたが拒否した。不満であったであろう。④動機は三別抄の解散命令を拒否したことによる。⑤参加者は三別抄軍を含めた多数である。⑥解明端緒と結末は高麗政府軍の金方慶は蒙古軍の元帥忻都（きんと）等とともに珍島を攻陥して承化侯溫を斬った。三別抄の指揮者将軍の裴仲孫は戦死した。

顛末寸評は江都を守っていた三別抄軍は王の開京遷都により解散命令を拒否して，承化侯溫を擁立して叛した。抗蒙勢力となった三別抄軍は蒙古及び高麗政府とも戦い将軍裴仲孫は戦死したのである。

以上，列伝第四十三「叛逆」㈣に見える立伝人物16名について，①叛逆時の王名と年代，②出自と官職，③王朝の待遇，④動機，⑤参加者，⑥解明端緒と結末等について分析検討し，最後に謀叛顛末寸評を加えた。以下において各人物の特色について16名の分析結果をまとめることにする。

⒤ 「叛逆」㈣の人物分析

「叛逆伝」㈣に見える人物分析をした①叛逆時の王名と年代から⑥の解明端緒と結果までをまとめた一覧表は表Ⅲの通りである。

①叛逆時の王名と年代では第23代高宗代が9例，第24代元宗代が7例と合計16例がある。この時代は所謂「叛乱の世紀」と「反蒙闘争」の時期で叛逆者は蒙古（元）側についた者9名，高麗政府と戦った者及び三別抄軍のように蒙古と高麗政府とも戦った人物が7名もいた。

②出自と官職では⑴と⑵の韓恂と多智は義州の戍卒から副将や郎将となり，叛乱により自ら元帥と称した人物である。⑶洪福源は西京の郎将で父は麟州の都領であった。元側につき東京総管となった人物である。⑷李峴は出自不明である。枢密院副使となった。自ら達魯花赤と称し蒙古側につき忠州城を攻めて失敗した人物である。⑸趙叔昌は横城の人で平章事冲の子である。防戍将軍から上将軍へとなった人物で蒙古側にくだり畢賢甫の乱につらなり市斬された。⑹趙暉は漢陽の人で蒙古側につき執平及び登州和州の副使と京別抄等を殺害し，和州以北（鉄嶺）を蒙古に附し，雙城総管府の総管となった。⑺金俊は父は賤隷出身で殿前承旨，衛社功臣2等，右副承宣となり崔竑にうとんぜられた。その後，林衍との権力争いで殺害された人物である。⑻林衍は母は州吏の娘で隊正，衛社功臣，枢密副使となった。蒙古の世祖から元宗の廃立を問責されて復位させている。疽を発し病死した人物である。⑼林惟茂は林衍の子で教定（校定）別監となっている。蒙古の出陸命令を拒み市斬された人物である。⑽趙彝は僧で還

表Ⅲ　「叛逆伝」㈣立伝人物叛逆関係一覧

	人　名	叛逆時の王名と年代	出自と官職	王朝の待遇	動　機	参加者	解明端緒と結末
1	韓恂 （？～1220）	高宗６年 （1219）	義州の戍卒から副将へ 武臣・叛乱者 自ら元帥と称す。	不明・不満	国倉を開いて民衆に与える。	多数	防戍将軍を郎将の多智と殺しておる。王は三軍に命じ討たしめる。金の元帥亐哥下に誘殺。首は京に送られる。
2	多智 （？～1220）	高宗６年 （1219）	義州の戍卒から郎将へ 武臣・叛逆者 自ら元帥と称す。	不明・不満	韓恂と同一であろう。	多数	韓恂と同一で結末は金の元帥亐哥下に誘殺されている。
3	洪福源 （1206～1258）	高宗20年 （1233）	西京の郎将 父麟州都領 元側につき東京総管となる。	不明・不満	高宗18年撒礼塔の入侵時に降る。	多数	西京の郎将となり，畢賢甫と城にたてこもり叛乱。宣慰使大将軍鄭毅と朴禄全を殺す。 西京丘墟となる。 壮士に蹴殺。 家産籍没。
4	李峴 （？～1254）	高宗41年 （1254）	出自不明 枢密院副使 自ら達魯花赤と称す。	良好	蒙古側につき忠州城等を攻める。	二城の余民多数	忠州城を攻めて失敗。蒙古に帰れず叛逆者となる。 棄市籍没。
5	趙叔昌 （？～1234）	高宗21年 （1234）	横城の人 平章事沖の子 防戍将軍から上将軍へ。	良好	蒙古側にくだる。西京の畢賢甫の乱につらなる。	不明多数	畢賢甫の乱につらなり市斬。
6	趙暉 （生没年未詳）	高宗45年 （1258）	漢陽の人 和州雙城総管府の総管。	不明・不満	蒙古侵入時島に移る。食糧不足。	多数不明	蒙古側につき執平及び登州和州の副使と京別抄等を殺害。 和州以北（鉄嶺）を蒙古に附す。 雙城総管府の総管となる。
7	金俊 （？～1268）	高宗45年 （1258）	父は賤隷出身 殿前承旨 衛社功臣２等 右副承宣	良好	崔竑にうとんぜられる。	多数	崔竑にうとんぜられたためである。その後，林衍との権力争いで殺害されている。
8	林衍 （？～1270）	元宗10年 （1269）	母は州吏の娘 隊正 衛社功臣 枢密副使	良好	元宗の廃位を企てる。	多数	世祖から元宗の廃立を問責され復位させている。 疽を発し病死。
9	林惟茂 （？～1270）	元宗11年 （1270）	林衍の子 教定（校定）別監	不満	蒙古の出陸命令を拒む。	多数	蒙古の出陸命令を拒む。 市斬。
10	趙彝 （生没年未詳）	元宗代 （1260～1274）	咸安の人 僧で還俗する。 進士合格 官職不明 元の帝所に出入。	不明	高麗に反きて元に入る。	不明	常に人をそしりきずつけて，志を得ずして死んだ。
11	金裕 （生没年未詳）	高宗代 （1214～1259）	文科に登第 弓箭陪卒	不明	永寧公綧の弓箭陪卒で蒙古に附す。	不明	高麗に三山の薬物を求む。王答書して誣妄を弁ぜり。

12	李枢 （生没年未詳）	元宗代 （1260～1274）	上将軍応公の子元に仕える。	不明	不明	不明	高麗に多くの産物を徴求して頗る累を及ぼす。 王，元に請い罷む。
13	韓洪甫 （生没年未詳）	高宗代 （1214～1259）	楹城の人 蒙古に反して入る。 也速達に我が子の如く愛される。	不明	兄洪弼を怨み反して蒙古に入る。	不明	兄の遺産及び楹城の大井寺のあな蔵にある自分の銀物を取らんことを請う。 懐土の情に勝えず，以て来る。追捕され蒙古に送られる。
14	于琔 （？～1273）	元宗元年 （1260）	枢密院使仁揆の子である。 訳語（官）を以て郎将（正6品武官）となる。	不明	也速達の営に留まりいろいろと訴えた。	多数 不明	也速達の営で太子倎（後の元宗）と対弁させられる。 東還後，元宗14年誅された。
15	崔坦 （生没年未詳）	元宗10年 （1269）	西北面兵馬使営吏 東寧府の総管。	不明	林衍の元宗廃立で叛乱。	多数 不明	蒙古（元）の世祖に投降。 西京を東寧府と改号して崔坦総管となる。後，誣告事件で虚構と判明し服罪。
16	裴仲孫 （？～1271）	元宗11年 （1270）	元宗朝に官を累ねて将軍に至る。	不満	三別抄の解散命令を拒否。	三別抄軍・多数	金方慶は蒙古軍の元帥忻都等とともに珍島攻陥。承化侯温を斬殺。 指揮者将軍裴仲孫戦死。

俗して進士に合格したが官職は不明。高麗に反き元に入って，元の帝所に出入。常に人をそしりきずつけて，志を得ずして死んだ人物である。⑾金裕は文科に登第し弓箭陪卒となった。⑿李枢は上将軍応公の子で元に仕えた。高麗に多くの産物を徴求して頗る累を及ぼした人物である。⒀韓洪甫は兄洪弼を怨み反して蒙古に入り也速達に我が子の如く寵愛された人物で，懐土の情に勝えられず，以て来たりて追捕され蒙古に送られた人物である。⒁于琔は枢密院使仁撥の子である。訳語（官）を以て郎将（正6品武官）となった人物で，也速達の営で太子倎（後の元宗）と対弁させられ，東還後，元宗14年誅された人物である。⒂崔坦は林衍の元宗廃立で叛乱。蒙古（元）の世祖に投降し，西京を東寧府と改号して崔坦は総管となった。後，誣告事件で虚構と判明し服罪した人物である。⒃裴仲孫は元宗朝に官を累ねて将軍に至った人物である。三別抄の解散命令を拒否し，蒙古及び高麗政府軍の連合軍と戦い指揮者将軍裴仲孫は戦死した。

③王朝の待遇は良好なのは⑷李峴，⑸趙叔昌，⑺金俊，⑻林衍の4名で途中から叛逆者となるが其の他の人物は不明か不満であろう。

④動機については後でまとめて小結論とする。

⑤参加者は⑷李峴の忠州城を攻めた時，二城の余民・多数⒃裴仲孫の三別抄軍・多数等が判明するが其の他はほとんど不明・多数の参加者となっている。

⑥解明端緒と結末は表Ⅲの通りである。その主なものは次の通りである。⑴と⑵の韓恂と多智は防戍将軍を殺し金の元帥亐哥下（ウゲハ）に誘殺されている。⑷の李峴（けん）は蒙古側につき忠州城を攻めて失敗し，蒙古に帰れず叛逆者として棄市籍没されている。⑹趙暉は蒙古側につき和州以北（鉄嶺）を蒙古に附し，雙城総管府の総管になった人物である。⒂崔坦は蒙古（元）の世祖に投降し，西京（平壌）を東寧府と改号して総管となった人物で，後に誣告事件で虚構と判明し服罪している。⒃裴仲孫は三別抄の解散命令を拒否して金方慶及び蒙古の元帥忻都等に珍島を攻陥され，承化侯温は斬殺，指揮者将軍裴仲孫は戦死している。

「叛逆伝」㈣の人物分析をふまえて④動機についてまとめて小結論とする。

小 結 論

「叛逆伝」㈣の16例は第23代高宗代の9例と第24代元宗代の7例である。この時期は「叛乱の世紀」と「反蒙闘争」の時代である。叛逆者は蒙古（元）側に投降した者は9名。高麗政府と戦った者と三別抄軍のように蒙古及び高麗政府とも戦った人物は7名もいた。叛逆の概念が叛逆者が蒙古（元）側に投降して高麗政府をおとし入れようとするケースが加わり，高麗政府と叛逆者と蒙古（元）側への投降叛逆者と高麗政府という型になる。後者の場合，例えば三別抄軍は王の解散命令を拒否して高麗政府軍及び蒙古軍の連合軍と戦ったのは叛逆者という側面より「反蒙闘争」者と評価される側面が強い。それは高麗政府は江都より出陸して蒙古側（元）に帰順服属したからである。その江都でのおよそ前後40年の蒙古との交渉は「蒙古を翻弄」させ「事大的外交の成功」であったと見なされている[18]。

表Ⅲ「叛逆伝」立伝人物叛逆関係一覧で示したように，④「叛逆」動機は⑴韓恂と⑵多智は国倉を開いて民衆に与えている。そして防戍将軍を殺している。西北面兵馬使金君綏や金の元帥亐哥下は「後斬叛臣韓恂多智，函首送京」としている[19]。⑶洪福源は高宗18年の8月撒礼塔の侵入時に「国人洪福源迎降于軍」すとあり迎降している[20]。福源は壮士に蹴殺され家産は籍没されている。畢賢甫と城にたてこもり叛乱をおこしている。⑷李峴は蒙古側につき忠州城を攻めている。失敗し蒙古に帰れず叛逆者となって棄市籍没されている人物である。⑸趙叔昌は蒙古兵元帥撒礼塔に咸新鎮で囲まれて「若し出で降らば城中の人，猶お，死を免かれんと。叔昌之を然りとし，遂に城を以て降る」と云われ投降した人物である。畢賢甫の乱（西京叛乱）につらなり「罪に坐し」ている人物である。⑹趙暉は定州の人卓青等と合謀して「蒙古兵を引き，虚に乗じて」執平及び登州和州の副使と京別抄等を殺害し，和州以北（鉄嶺）を蒙古に附している。蒙古は雙城管府を和州に置き暉を総管，青を千戸となしている。⑺金俊は林衍とともに権臣崔竑を誅して衛社功臣となった人物である。崔竑にうとんぜられて，林衍との権力争いがもとで殺害された人物である。⑻林衍は衛社功臣となったが，元宗の廃位を企て[21]世祖から元宗の廃立を問責され復位させている。このことを燕京（蒙古）から帰国途中の世子（後の忠烈王）に知らせたのは静州官奴丁五孚であった[22]。⑼林惟茂は林衍の子で蒙古の出陸命令を拒み市斬された人物である[23]。⑽趙彝は咸安（慶尚道咸安郡）の人で僧であったが還俗して進士に合格した人物である。高麗に反き元に入り，「諸国の語を解し，帝所に出入して本国を讒毀（ざんき）（そしる）す」といわれ志を得ずして死んだ人物である。⑾金裕は文科に登第し，永寧公綟の弓箭陪卒として蒙古に入り附（投降）している。高麗本国に三山の薬物を求めて王が答書して誣妄を弁じている。⑿李枢は上将軍応公の子で元に仕えた人物である。動機は不明である。高麗に多くの産物を徴求して頗る累を及ぼした人物である。⒀韓洪甫は兄洪弼を怨みて反して蒙古に投じた人物で也速達に我が子の如く寵愛された。故郷にある兄の遺産及び楹城の大井寺のあな蔵に隠しおいた銀物を取らんことを申し出てから，故郷に帰って久しくたち，夜別抄を遣して追捕され蒙古に送られた人物である。⒁于琁は枢密院使仁撥の子で訳語（官）を以て郎将（正6品武官）となった人物である。蒙古に使いして也速達の営に留まりいろいろと訴えた。于琁は也速達の営にいた太子倎（後の元宗）と対弁させられている。東還後，元宗14年に誅された人物である。⒂崔坦は西北面兵馬使営吏で後に東寧府の総管となった人物である。坦は林衍の元宗廃立で叛乱をおこした人物である。洪禄遒（ろくゆう）は西北面兵馬使となって至営十日で「崔坦之乱作」にあっている。坦は人をして禄遒に次のように云わしめている。「林衍擅廃立，朝無忠臣。吾等奮激，欲誅首悪，復戴吾王耳。」（林衍擅に（元宗を）廃立す。朝に忠臣無し，吾等奮激して首悪を誅し，復た吾王を戴かんと欲するのみ）と[24]。蒙古（元）の世祖に投降し，西京を東寧府と改号して坦は総管となった。後ち，誣告事件で虚構と判明し服罪した。⒃裴仲孫は元宗朝に官を累ねて将軍に至った人物である。三別抄の解散命令を

拒否し，高麗政府軍金方慶及び蒙古軍の元帥忻都等に珍島は攻陥（かん）され，三別抄の指揮者将軍裴仲孫は戦死したのである。

元朝と高麗との関係は大体1259年（元憲宗９年，高麗高宗46年）が界線とされ，前後両時期に分けられている[25]。前期は「以戦迫降，降而復叛」で後期は「相対独立の政権と姻親（姻戚関係の親族）関係」と見ている。1259年は１月に崔滋が出陸還都を主張し，４月に太子倎（後の元宗）が講和交渉のため蒙古に行っている。６月に高宗はなくなり，蒙古は江都，内外城を破壊している。1260年３月に太子が帰国し４月に康安殿で即位したのが元宗である。元朝と高麗の関係は宗藩関係であり，元朝から８人の公主（天子のむすめ）が下嫁し，駙馬の地位関係でもある。中国文化を吸取してきた高麗は元代が最も開放的時期で元・麗文化交流は頻繁に行なわれていた。経済上は「薄来厚往」の関係にあり，文化上非常に寛容な時代で思想統制や禁書などなかった。朱子学や北宋の理学が導入されている。しかし，蒙古（元）の積極的干渉で使行（節）の来往は多く，来往に伴う弊害は極めて大であった。高宗30年（1234）の状況は次のようにいわれる。

時両国使价往来，無定限或一歳而四五焉，蒙使之来一行，至数十百人，贈遺洪億，不可勝紀（記）。

（『増補文献備考』交聘考３参照）

両国の使用人の往来は定限が無く１年に四五回もある。蒙使の一行は数十百人に至る。物を送って安心させねばならないが記述してこたえられないくらいであるとあり，この様に蒙使の苛斂誅求は甚しかった。

「叛逆伝」㈤以下に見える立伝人物の分析を通して「叛逆の動機要因」と「社会の矛盾構造」について更に解明したいと思う。今後の検討課題としたい。

註

1）武田幸男著「10 新羅の滅亡と高麗朝の展開」岩波講座『世界歴史』９東アジア世界の展開Ⅰ所収，501頁，1970年。

2）前掲書，同頁。

3）前掲書，502頁。

4）前掲書，503～4頁。

5）（史料１）と（史料２）

韓恂　多智

韓恂・多智，皆義州戍卒，恂，爲別將，智，爲郎將，高宗六年，二人反，殺其防戍將軍趙宣，及其守李棣，自稱元帥，署置監倉使及臺官，擅發國倉，諸城響應，遣將軍趙廉卿・郎中李公老，招撫之，恂・智黨五十餘人，至嘉州客舍曰，兵馬使趙冲・金君綏・丁公壽等，清白愛民，餘皆貪殘，厚歛於民，剝膚椎髓，不堪其苦，乃至於此耳，崔怡，聞其言，以安永麟・柳庇・俊弼・李貞壽・崔守雄・李世芬・高世霖・洪文敍・李允恭・崔孝全・宋自恭・李元美・崔謐等，嘗諂事忠獻，或爲按察，或爲分道分臺監倉使，或求巨邑，侵漁無厭，分配諸島，先是，朔州分道將軍黃竜弼，性貪暴，用刑慘酷，州人，知竜弼意在求貨，賂以官藏銀器，竜弼，巡至安北都護符，恂智黨，來攻其府，齊聲唱曰，朔州銀器，宜速還之，竜弼，慚憤自刎，時，北界諸城，多爲恂智所陷，於是，命三軍往討，明年，恂智等，以清川江爲界，投東眞，潛引金元帥亐哥下，令屯義州，自領諸城兵，屯博州，相爲聲援，中軍知兵馬事金君綏，與宣撫使李公老議，遣義州人郎將尹忠孝・朴洪輔，寄書亐哥下，開陳本末，諭以禍福，責其違盟，亐哥下，悟佯怒，卽囚忠孝等，遣義州郎將郭允昌，召恂智，恂智，擁兵六百赴之，亐哥下，宴慰，并及諸城賊魁，慰籍甚厚，因疏其姓名，翼日，伏兵設宴，酒酣伏發，捕恂智及其黨尹大明・韓存烈等，悉誅之，亐哥下，遣忠孝移牒，并函恂智首，送于京，國家，分配其黨于海島，後皆遇赦還鄕，九年，恂智黨，復引東眞兵萬餘，入靜州，遂侵義州，防守將軍守延，與戰敗績，麟州人，謀與賊通，爲內應，防守將軍，知之，出屯城外，以解其謀，勒兵掩襲東眞兵，斬二百餘級，王，遣中軍兵馬使李迪儒・右軍兵馬使趙廉卿・後軍兵馬使金淑竜，發西京兵，追捕之，又有振威縣人令同正李將大・直長同正李唐必者，乘契丹之亂，與同縣人別將同正金禮，謀不軌，嘯聚徒衆，劫奪縣令符印，發倉賑貨，村落飢民，多附之，移牒旁郡，自

稱靖國兵馬使，號義兵，至宗德・河陽二倉，發粟，悉人所取，將寇廣州，王，遣郎將權得才・散員金光啓等，與按察使崔博，發廣・水二州兵，討之不克，更徵忠淸・楊州道兵，攻之，獲唐必禮，賊徒潰散，將大，奔尙州，被擒，按察使，械送于京，皆伏誅。

6）（史料２）は（史料１）と同じ。

7）（史料３）

洪福源

洪福源，初名福良，本唐城人，其先，徙居麟州，父大純，爲麟州都領，高宗五年，遣哈眞・扎剌，攻契丹兵于江東城，大純迎降，十八年，撤禮堵，大擧入侵，福源，又迎降于軍，二十年，福源，爲西京郎將，與畢賢甫，殺宣諭使大將軍鄭毅・朴祿全，據城反，崔怡，遣家兵三千，與北界兵馬使閔曦，討之，獲賢甫，送京，腰斬于市，福源，逃入元，於是，擒其父大純，及女子弟百壽，悉徙餘民于海島，西京，遂爲丘墟，福源在元，爲東京摠管，領高麗軍民，凡降附四十餘民，皆屬焉，讒構本國，隨兵往來，怡，患之，欲悅其心，官大純，爲大將軍，百壽，時爲僧，髮之，爲郎將，以張暐，爲福源女壻，賄賂不絕，福源感之，讒構稍弛，然自是，元兵歲至，攻陷州郡，皆福源，導之也，三十七年，元，徵大純入朝，永寧公綧之入質也，寓於福源，福源，待之甚厚，久乃生釁，綧積不平，四十五年，福源，密禮巫，作木偶人，縛手釘頭，埋地或沉井，咒詛，校尉李綢，嘗逃入元，依綧，覘知之，以奏帝，遣使驗之，福源曰，兒子病虐，故用以厭之耳，非有他也，因謂綧曰，公，受恩於我，久矣，何反使讒賊，陷我耶，所謂所養之犬，反噬主也，綧妻，蒙古女也，聞其語聲，甚厲不遜，呼譯者具問，大怒，呵福源，伏於前，切責曰，汝在爾國，爲何等人，曰邊城人，又問我公，爲何等人，曰王族，曰然則眞乃主也，汝實爲犬，反以公，爲犬噬主，何哉，我，皇族也，帝以公，爲高麗王族而嫁之，妾，以是，朝夕恪勤，無貳心，公若犬也，安有人而與犬同處者乎，吾當奏帝，遂詣帝所，福源號泣，叩頭乞罪，綧，追止之不及，福源傾產，備賄，貨與綧，倍道追之，中途，遇勅使，勅使，卽令壯士數十人，蹴殺福源，籍沒家產，械其妻及子茶丘・君祥等以歸，福源諸子，憾父之死，謀陷本國，無所不至，元宗二年，茶丘，雪父冤，帝詔曰，汝父，方加寵用，誤詿刑章，故於已廢之中，庸霈維新之澤，可就帶元降虎符，襲父職，管領歸附高麗軍民摠管，十二年，茶丘，奉詔來，見王不拜，以中書省牒，索其叔父百壽，王，拜百壽樞密副使，致仕，將遣之，茶丘，故爲遷延，竟不偕去，蓋欲激帝怒，恐動之也，時，官奴崇謙・功德等反，謀殺達魯花赤，事覺，捕鞫之，茶丘，欲使崇謙等，辭連本國，因起兵，襲取京城，密引達魯花赤脫朶兒，議之，蒙古法，凡議事，意合則脫冠，以示其從，茶丘等，皆脫冠，脫朶兒不脫，爲之明弁故免，茶丘，討三別抄于珍島，其族屬及無賴之徒，多從之，明年，倭船，泊金州，慶尙道安撫使曹子一，恐元責交通，密令還去，茶丘聞之，嚴鞫子一，鍛鍊以奏曰，高麗，與倭相通，王，遣張暐，請釋子一囚，一日，茶丘，遽還元，人莫知其故，王，慰諭之，十五年，帝，將征日本，以茶丘，爲監督造船官軍民摠管，茶丘剋期，催督甚急，分遣部夫使，徵集工匠，諸道騷然，帝，又命茶丘，提點高麗農事，又命爲東征副元帥，茶丘，以忠淸道稍工水手，不及期，杖部夫使大將軍崔沔，以大府卿朴暉，代之，茶丘，與忽敦・金方慶等，征日本，忠烈三年，帝欲復征日本，以茶丘，爲征東都元帥，時，韋得儒等，誣構方慶，大獄起，茶丘，在東京，聞之奏帝，來問，欲令方慶誣服，嫁禍於國，栲訊極慘酷，未幾，帝，召還，語在方慶傳，茶丘，常怨本國，君祥以爲，寧怨永寧公，不敢負國，爲本國，興利除害，無不力焉，十八年，帝，又欲征日本，令本國造船，君祥進言曰，軍事至大，宜先遣使，問諸高麗，然後行之，帝，然之，遣君祥來問，王曰，臣，旣鄰不庭之俗，庶當躬自致討，以效微勞，明年，元，遣君祥兄熊三子波豆兒，來管造船事，波豆兒，望王宮，下馬流涕曰，雖云衣錦還鄉，職是勞民，可愧也，禮遇宰相甚恭，二十年，帝崩，君祥，白丞相完澤，寢東征，二十一年，王，嘉君祥功，封三韓壁上功臣三重大匡益城侯，尋封都僉議中贊修文殿大學士監修國史世子師臨安公，國制，非出身科第，不得爲文翰官，崔怡擅政，自爲監修國史，猶不得兼修文殿，君祥，時爲元朝集賢大學士，故得拜焉，百壽子詵，官累僉議評理，忠宣初，拜贊成事，尋封麟城君，改封江寧君，忠肅五年卒，子綏・鐸・翊，孼子明理和尙，貪暴驕橫，其妹，適元寵臣亦剌赤，明理和尙隨之，遂爲亦剌赤所愛，嘗奉御香來，強奸評理洪順女，女從兄洪承衍，面辱之，明理和尙，訴行省，囚承衍，暐，興海人，位至中贊，致仕卒，年八十一，謚純靖，無他功，能以君祥等仕元，有功本國，故凡遣使入朝，多以暐副之，遂至極品，子碩登第，至判密直司事，有柳宗者，初附崔沆，爲江華判官，及金俊，謀誅沆子竑，宗，與文璜，欲殺俊，事洩，流海島，嘗與寡妹，宿一房，虎穿壁，攫其妹，嚙斷宗一臂，後又附茶丘，好說國家陰事，得罪，沒其家。

8）（史料４）

李峴

李峴，高宗時人，性貪婪，好傷人，嘗爲選軍別監，多受賂銀，人號銀尙書，轉官至樞密副使，使于蒙古，被留

二年，說也窟曰，我國都，介于海島，貢賦皆出州郡，若於秋前，奄襲州郡，都人必窘，遂受金牌，導也窟而來，隨蒙古兵，諭降諸城，至楊根・天竜二城，脅之曰，椋山・東州・春州等城，並以不降，見屠，宜速出降，若守將不許，卽斬以來，二城降，自爲達魯花赤，率二城降民，攻忠州城，七十餘日不下，及蒙古軍還，不得隨去，乃來其軍中，所獲婦女財寶，盡爲已有，銀釵，至滿一笥，宰樞會議曰，峴，以宰相犯叛逆，宜赤族，於是棄市，籍其家，有人蹴其口曰，喫盡幾人銀帛耶，沉其子之瑞・之松・之壽・之栢・永年于海，妻及姉妹女壻，並流于島。

9）（史料 5）

趙叔昌

趙叔昌，平章事冲之子，高宗十八年，以防戍將軍，在咸新鎭，蒙古元帥撒禮塔，來圍鎭曰，我是蒙古將也，汝可速降，否則屠之，副使全僩懼，與叔昌謀曰，若出降，城中之人，猶可免死，叔昌然之，遂以城降，謂蒙古人曰，我趙元帥沖之子，吾父，曾與貴國元帥，約爲兄弟，僩，發倉餉蒙古軍，叔昌爲書，諭朔州宣德鎭，使迎降，蒙古人所之，令叔昌，先呼曰，眞蒙古也，宜亟出降，至鐵州城，蒙古，攻之愈急，判官李希績，死之，蒙古，遂屠其城，未幾，咸新鎭，報于朝曰，國家，若遣舟楫，當盡殺蒙古人小尾生等，卷城如京，乃命金永時等三十人，具舟楫以往，果殺蒙古人幾盡，小尾生，先覺亡去，僩，率吏民，入保薪島，後，挈家乘舟，還京溺死，叔昌，官至上將軍，畢賢甫之反，辭連，斬于市。

10）（史料 6）

趙暉

趙暉，本漢陽府人，後徙居竜津縣，高宗四十五年，蒙古兵大至，高・和・定・長・宜・文等十五州人，入保猪島，東北面兵馬使愼執平，以猪島，城大人少，守之甚難，遂以十五州人，徙竹島，島狹隘，無井泉，人皆不欲，執平，強驅納之，人多逃散，入者十二三，糧儲乏少，執平，分遣別抄，請粟於朝，催運他道，守備稍懈，暉，與定州人卓靑，及登・文州諸城人，合謀，引蒙古兵，乘虛殺執平，及登州副使朴仁起・和州副使金宣甫・京別抄等，遂攻高城，焚燒廬舍，殺掠人民，以和州迤北，附于蒙古，蒙古，乃置雙城摠管府于和州，以暉爲摠管，靑爲千戶，明年，暉黨，自稱官人，引蒙古兵，來攻寒溪城，防護別監安洪敏，率夜別抄，出擊盡殲之，王，使郎將金器成・別將郭貞有，賣國贐，如蒙古屯所，慰之，器成等，至文州，暉黨，在寶竜驛，與蒙古兵三十餘人，殺器成等幷傔從十三人，掠國贐而去，暉黨，又引東眞國兵，屯春州泉谷村，有神義軍五人，詐稱蒙古將軍羅大使者，馳入其屯曰，解爾弓劍，聽元帥敎命，高麗太子，將入朝，汝何殺高麗使者，奪國贐乎，爾罪當死，皆伏地股栗，於是，揮鞭召別抄，四面攻之，無一脫者，遂得國贐，及器成等衣物而還，元宗十二年，襄州民張世・金世等，以蒙古，將有所鞫，謀殺守令吏士，將逃匿遠地，事覺伏誅，其餘黨天瑞等八人，潛投暉請兵，暉，給四百餘人，猝入襄州，執縛知州事兩班等，誣以謀率人民，徙居海島，遂欲脅遷于和州，王，請達魯花赤，遣人往諭，天瑞不聽，驅掠知州及吏民一千餘人而去，王，奏于蒙古，請治天瑞等罪，帝，遣只必哥，來問之，時，只必哥，在西京，暉，自蒙古還，謂只，必哥曰，我奏襄州人，實自納欵上朝，非我驅迫其民，帝，卽以詔授我，使勿問，只必哥，遂不問，子良琪，襲摠管，孫暾，自有傳。

11）（史料 7）

金俊

金俊，初名仁俊，父允成，本賤隷，背其主，投崔忠獻爲奴，生俊及承俊，俊，狀貌魁岸，性寬厚，謙恭下人，又善射，好施與，以得衆心，日與遊俠子弟群飮，家無所儲，有術僧，見之曰，此人，後必當國，朴松庇・宋吉儒等，譽於崔怡，怡遂倚信，每出入，必使俊扶持，授殿前承旨，俊，通怡嬖妾安心，配固城，數年乃還，怡之召沆爲俊，俊有力焉，及沆襲權，補別將，益親信，沆死，竝，獨任崔良伯・柳能，而俊，踈俊心不平，及吉儒之敗，益相疑貳，高宗四十五年，與柳璥・松庇等，誅竝，復政于王，俊進曰，竝，不恤生民，坐視餓死，而不賑貸，臣等，擧議誅之，請發粟賑饑，以慰人望，卽授將軍，賜衞社功臣號，策勳爲第二，尋拜右副承宣，初，有權施者，娶怡妓妾女，得拜僕射，子守鈞，拜將軍，守鈞女壻文璜，亦拜少卿，及施父子以事罷，竝又被誅，璜，心常快快，欲殺俊，爲竝報仇，璜子光旦・英旦，與隊正崔注・錄事柳宗植・李秀之・校尉玄君壽等，交結，一日，璜，密諭注・秀之，謀殺俊，二人許諾，因招君壽議之，君壽猶予，秀之，以告宗植，宗植許之，乃與璜父子，會密室，屛左右謀之，將各引所親勇士擧事，宗植，住別將金仁問家，見壁上有弓劍，取而撫之曰，君丈夫也，當此時，可以此物，取卿相，安能效兒女子碌碌乎，仁問，異其言而不對，宗植去，仁問，恐禍及已，遂語指諭白永貞，告俊，逮捕宗植，問之果服，俊以爲，宗植素狂，其言戲耳，譴而放之，君壽，聞宗植被鞫，奔夜別抄營，告璜等謀，俊聞之，鞫璜・注・光旦・英旦・秀之等，殺之，流守鈞父子・宗植于島，籍璜，守鈞家產，以與仁問・君壽，又以盲僧伯良，卜其吉凶，投海籍其家，宦者金亦仁宣，性溫雅，王，甚愛之，

俊，啓事，仁宣，出入傳旨，相與比附，俊妻，又仁宣姪女也，仁宣年六十，官極于南班七品，俊，力請除叅職，王，亦欲授之，恐成後例，竟不許，元宗元年，改策功，以俊，爲第一，進樞密院副使御史大夫柱國太子賓客翼陽郡開國伯食邑一千戶食實封一百戶，一日，往水州廣因院，施酒食於行路，從者如雲，皆著戎服，四年，守太尉叅知政事判御史臺事太子少師，明年，蒙古，徵王入朝，俊，爲王設百高座於大觀殿，講仁王經，王，謂俊有忠誠，賜從者爵有差，又命爲校定別監，糾察國家非違，王，如蒙古，命俊監國，俊，以別抄三十人，晝夜衛其家，王，還國，欲封侯立府，下制曰，叅政金俊，事我先王，誅戮權臣，復政王室，扶立寡躬，奉承宗祀，功業之盛，夐出千古，頃者，北朝，責令親朝，以無舊例，依違未決，大兵連歲來侵，國勢日危，又北使，來督親朝，朝議紛紛，罔知所從，俊，爲國深謀，奏留使臣，督弁方物盤纏，俾不違約，與使偕行，果蒙天眷，錫與便蕃，不日還國，社稷復安，厥功重大，宜荅以殊恩，有司，其議以聞，六年，拜侍中，尋册爲海陽侯，一依晉陽公故事，俊，嘗以事，囑忠淸道按察使邊保，保不聽，俊，白王流之，以夜別抄指諭金革精，代之，又募射士，多出銀罌，許中者取之，時，能射者以百數，未有中者，有一人中之，卽授與散員，俊，令四品以上，出銀有差，以充國賸，又遣使，購富民金銀，法苛峻，民多愁怨，舊制，八關閱樂日，堂後門下二人，盛設宴，近因兵荒，廢之已久，俊，以閱樂，不可無宴，乃置廣庭宴禮都監，移牒州郡，備供具，民甚苦之，後遂寢，俊家臣高耳・別監文成柱，倚俊勢，剝民，無所不至，有人，帖匿名書于御史臺，訴之，俊，寢不問，九年，蒙古帝，遣使徵兵，勑俊父子，及其弟冲，皆赴京師，冲卽承俊也，俊，聽將軍車松佑言，謀欲殺使，深入海中，再白王，王不聽，俊謂松佑曰，上，固拒奈何，松佑等曰，竜孫，不但今上，諸王固多，況太祖，亦以將軍擧事，何有疑慮，俊，深然之，遂決謀，欲殺使，令都兵馬錄事嚴守安告冲，守安，詣其第，極言不可，冲信之，遂沮其謀，然俊益拒蒙古命，王甚快快，俊，恐蒙古責不入朝，大會五敎沙門於其第，供佛祈福，初，俊子承宣皚家奴，與竜山別監李碩，有憾，聞碩載內膳二艘，泊于江，訴碩於皚，皚以告俊，遣夜別抄奪之，入其家，分與夜別抄，未幾，俊見王，王，以碩所上膳狀，示俊，俊，變色退，還收以獻，王，卻之曰，旣奪而復獻，於義可乎，是皆寡人祭醮之須，碩，久稽不進，見奪於俊，是，碩罪也，流于島，遂以內侍權仁紀，代之，尋召碩還，由是，王，益惡俊，國子學諭洪惟敍，嘗以書狀，伴蒙古使，入朝，與金裕，說俊密事，有申百川者，素爲惟敍所侮，聞其言，以語俊，俊，殺惟敍，俊自言，嘗誅權臣，發畜積，活人多矣，雖臥市街，誰敢害我，由是，聞人惡言，不以爲意，烈置農莊，以家臣文成柱，管全羅，池濬，管忠淸，二人，爭事聚斂，給民稻種一斗，例收米一碩，諸子效之，競聚無賴，怙勢恣橫，侵奪入田，怨讟甚多，俊，嘗欲邀王于其家，撤鄰家，以廣其家，窮冬盛夏，晝夜督役，屋高數丈，庭廣百步，其妻尙嫌曰，丈夫眼孔，亦爾小耶，及封宅主，每入見宮主，拜乎上，俊，旣封侯，效宗室，右奉笏，每曰，平生所未慣，有時左奉，人譏之，時有淫巫，號鷄房，出入俊家，俊惑其言，國家事，皆占吉凶，時號鷄夫人，俊，每於蒙古使來，輒不迎待，使若徵詰，輒言可殺，樞副林衍，嘗與俊子爭田，俊曰，我在尙爾，況死乎，吾寧忍視此人耶，又衍妻，嘗手殺其奴，俊曰，此婦性惡，當遠流，衍，聞之益銜，郎將康允紹，得幸於王，且與衍相善，知王忌俊，又知衍・俊有隙，屢言於王曰，諸功臣，皆與俊善，惟林衍不附，又謂衍曰，國勢危殆，將若之何，衍曰，王如有命，臣豈惜死，允紹以奏，王曰，眞忠臣也，一日，衍謂宦者崔璁曰，國事至此，子盍告王，璁，佯許，內懷恇怯，遷延數日，衍，又謂曰，言出我口，入君之耳，萬一或洩，命在朝夕，奈何猶予，璁，卽與宦者金鏡，入奏，王曰，果若所言，何幸如之，衍，遂制大梃，盛櫝若膳物然，預置宮中，約口擧事，會，王出餞蒙古使，俊黨，皆不扈從，故未果，王恐事泄，終夜不寢，宣言有疾，分遣中使，禱諸神祠・佛宇，詰朝，俊不赴衙，鏡等，以王命召之，俊，急趨朝，俊妻族宦者朴文琪，知其謀，奔詣俊家，遇諸道，以左右擁衛，不能告，冲，聞俊赴衙，亦至朝堂，璁，傳旨，引俊至便殿前，稱王不予，引入政堂，令抄金尙梃擊之，俊大呼，遂斬之，又引冲入內，冲見血痕，欲走出，宦者金子廷，使其弟子厚，殺之，俊從者，欲入救，子廷當門，稱旨卻之曰，今俊兄弟，已皆誅戮，汝等入內何爲，其各同心衛社，遂推而出之，衍，分遣夜別抄，捕俊諸子，及其黨，皆斬之，俊子柱，聚其徒，謀拒之，夜別抄指諭高汝霖等至，柱謂汝霖來助己，且喜且懼，慰以好言，汝霖等，持疑未決，將軍曹子一，亦率介士繼至，不卽前，有校尉徐靖，射柱，誤中屋角，柱，走入門，子一等，麾其衆使退，柱，踰垣而走，追騎及斬之，前數日，柱夢，有一紫衣人，來坐廳上，使人執俊諸子，以針線貫之，最後及柱，針者曰，此亦貫乎，紫衣曰，何獨赦也，遂貫之，柱果後誅，俊子柱及碩材・大材・皚・祺・靖・碩材・大材早死，柱，初名用材，同知樞密院事，皚・祺・靖，後妻之出，皚嘗赴擧，平章金之岱掌試，難其第，擬以乙科四人，王，擢第三，初拜閤門祗候，至右副承宣，皚母，常與俊謀，欲而皚爲嗣，凡皚事，每右之，營其宅，多壞人家，樑棟楹桶，必以紋木異材，雖遠必致，金碧相輝，壯麗無比，園囿花卉，皆取奇品，祺・靖，皆將軍，冲，淸介自守，見其兄與諸姪所爲，常切責，俊與諸子，皆憚之，冲，臨刑嘆曰，予無所知，人皆惜之，又誅俊黨大將軍崔暉・將軍車松佑・康保忠・玄壽・朴承益・郎將方仲山・池濬・文成柱・指諭葛南寶，家奴誅者，不可勝紀，又流俊妻，及將軍崔公義・上將

軍金洪就于海島，將軍李悌・孫元慶，自刎死，初，俊流固城，縣人朴琪，頗有恩，俊，以爲養子，累授承宣，及俊誅，琪，快快不食肉，夜則潛泣，衍聞之，白王殺之，李宗器者，永州吏，逃入京，以勇力稱，從俊誅竝，累遷大將軍，衍，亦殺之，及死嘆曰，若知至此，當早殺衍，群臣表賀誅俊，松庇，初以德原吏，籍軍伍，以誅誼功，累官至叅知政事，性寛洪，不與人爭功，忠烈四年卒，子，成大。

12–1）（史料８）　12–2）（史料９）

林衍　惟茂

林衍，初名承柱，其父不知何許人，僑寓鎭州，聚州吏女，生衍，遂以鎭州爲貫，衍，蜂目豺聲，捷以有力，能倒身臂行，或投蓋于屋梁，爲大將軍宋彦祥廝養卒，後歸其鄉，蒙古兵適至，衍與鄉人逐之，遂補隊正，有林孝侯者，通衍妻，衍知之，誘孝侯妻，通焉，孝侯，告有司，有司，欲治衍罪，金俊，壯其爲人，力救得免，又薦爲郎將，故衍常呼俊爲父，沖爲叔父，衍，與俊誅竝，爲衞社功臣，累遷樞密副使，及俊當國，專擅威福，元宗忌之，衍，又與俊有隙，遂與金鏡・崔璁等，誅之，又忌鏡・璁勢逼已，遣夜別抄，捕鏡・璁及其弟琪，斬之梟市，御史大夫張季烈，善騎擊毬，性恬淡有禮，爲王所親信，常出入臥內，大將軍奇蘊，爲王庶妹壻，叅典機密，又籍俊家財，以珍寶，賂鏡・璁，衍，惡之，並流于島，集三別抄・六番都房于毬庭，與宰相議曰，我爲王室，除權臣，王，乃與金鏡等，謀欲殺我，不可坐以受戮，我欲行大事，不爾，竄之海島，如之何，宰樞莫敢對，衍，歷問之，侍中李藏用，乃以遜位，爲言，叅知政事兪千遇，力言不可，衍，未決而罷，翼日夜，衍，囚前將軍權守鈞・大卿李敍・將軍金信祐，歷數其罪曰，守鈞，以賤口，濫受大職，敍，淫其妻前夫女，信祐，奸父之妾，遂皆斬之，以恐衆心，衍，擐甲，率三別抄・六番都房，詣安慶公淐第，會文武百僚，奉淐呼萬歲，入本闕，卽王位，宗室百官朝賀，忽風雨暴作，拔木飛瓦，賀畢，衍，率然下階，拜藏用，蓋喜遜位之策也，時，王在辰巖宮，衍，使左副承宣李昌慶，逼出之，左右皆散，王，冒雨步出昌慶，進所乘馬，又使其從者五人，分侍王妃，遷于別宮，尋又遷王于金皚舊第，盜內帑珍寶，初，衍謀廢立，司空李應烈曰，竜孫非一，何必今王，至是，應烈，呼嘯踊躍，喜形於色，應烈，衍子惟茂婦翁也，淐，以衍，爲校定別監，衍，移入金俊舊第，淐，遣六番都房衞之，時，世子，自燕京，還至婆娑府，靜州官奴丁五孚，潛渡江告變曰，林衍，既廢立，恐東宮，聞亂不入國，使夜別抄二十人，伏境上以待，請毋入境，世子聞之，疑慮彷徨，大將軍鄭子璵等曰，彼竪子，何敢爾耶，無根之說，詎可信乎，羅裕，策馬進曰，事未可知，觀變而入，猶未晚也，毋爲賊臣所紿，武德將軍金富允，亦言之，諸校鄭仁卿，麟州守臣保子也，潛渡江，就父探問，具以狀還白，五孚亦曰，告奏使郭汝弼，亦在靈州，請使人見之，世子，使同來蒙古使者七人，執汝弼于靈州，又執義州防護譯語鄭庇，問知其實，然後，世子痛哭，欲還入蒙古，諸臣，皆猶予不肯從，獨仁卿，力勸乃行，衍，擅廢立，自謂莫敢誰何，及聞世子北還，日夜憂懼，將軍兪元績，與郎將鄭守卿，欲誅衍，復王位，言於將軍尹秀，秀，陽諾，奔告于衍，衍，捕鞫之，守卿不服，元績服，遂殺之，籍其家，蒙古遣使，責廢立，衍，誣王以病遜位對，蒙古又遣兵部侍郎黑的，詔徵王與淐及衍問之，衍懼，會宰樞其第，議荅詔書，衍嘆曰，我欲正國家而後，朝于帝所，今徵詰如此其急，將如之何，因泣下，宴黑的，賂珍寶甚多，又令三四品，各以空名實封，陳荅詔便宜，復宴黑的于其第，黑的言，宜復王位，衍不得已，會宰樞，議廢淐復立王，同知樞密趙璥，居常恭遜，頗得衆心，衍之廢立也，璥病不與，及衍擅權，朝野歸心於璥，將軍金文庇，欲誅衍與璥子將軍允璠，已定約，使告璥，璥不從，文庇，知事不集，反告於衍，衍，流璥于黑山島，殺允璠及璥女壻祕書郎張顥等七人，籍其家，又流璥子允溫，璥，力能圖衍，而恇怯速禍，時人惜之，一日，有人見慈恩寺設齊樹幡，告衍子惟幹云，亂作，官旗已竪矣，惟幹奔告，衍，闔門驚駭，王如蒙古，衍，恐王泄廢立事，使惟幹及腹心，扈從王，至京師，惟幹，因康和尙，綴縫其事，奏之，帝勑云，世子與李藏用，已具陳，朕所詳知，汝父擅廢王，信乎，惟幹奏，此李藏用所爲，請問之，帝，以問藏用及申思佺・元傅，各以實對，帝，頷之，惟幹復奏，帝止之曰，汝之所言，皆妄也，遂繫其頸，命中書省，牒衍曰，汝之子，有來奏，臣僚亦有來奏，朕意未詳，汝於此時，宜卽入朝明弁，衍，欲拒命，遣夜別抄于諸道，督民入居諸島，衍，憂懣，疽發背而死，天陰旬餘，至是開霽，時，順安侯琮監國，惟茂，請贈叅知政事，謚莊烈，琮又以惟茂，爲校定別監，惟茂，集都監六番，自衞其家，使惟梱，領書房三番，衞惟幹家，爲外援，惟茂，忌童謠讖說盛行，令曰，有能捕童謠及說圖讖者，賞以爵貨，召日官伍允孚等，問以鎭國之策，允孚曰，如病深而求醫，末如之何，帝，使頭輦哥國王・趙平章等，護王東還，王，先遣鄭子璵，諭國中臣僚，出都舊京，惟茂，意欲不從，恐衆議不合，使致仕宰樞三品以上・顯官四品以下，及臺省，各以實封，議可否，皆曰君命也，敢不從乎，惟茂忿怒，莫知所爲，分遣諸道水路防護使，及山城別監，聚保人民，以拒命，又使金文庇，領夜別抄，戍喬桐，以防北軍，衍所遣夜別抄，至慶尙道，督民入保諸島，按察使崔澗，與東京副留守朱悅・判官嚴守安，謀執夜別抄，囚金州，以待王還，及王入境，從閒道，赴行在，全羅道按察使權坦・忠淸道按察使崔有渰，見王傳諭・帝旨，皆感泣，卽曉諭州郡，西海道按察使邊亮，聞王還，奔詣行在，惟茂聞之，道人

追之不及，惟茂，以童穉，繼執父權，罔知所裁，每事，決於應烈與樞副致仕宋君斐等，姉夫婦史中丞洪文系，及直門下省宋松禮，外雖面從，心常憤惋，惟茂，將拒命，中外洶洶，文系，謀於松禮，松禮子琰及玢，俱爲衞士長，松禮・文系，集三別抄，諭以大義，謀執惟茂，惟茂，聞變，擁兵以待，三別抄，壞其家東門，突入亂射，衆乃潰，擒惟茂及姉夫大將軍崔宗紹，欲流于島，以蒙古使在館，恐生他變，皆斬于市，流應烈・君斐及族父宋邦又・李成老外弟李黃綬等，乃罷書房三番及造成色，朝野大悅，咸謂更生，應烈，剃髮而逃，追者獲之，至毬庭，有少年輩，樞其罪，爭拳之，惟梱，自剄未殊，蒙古使，見之，柅其喉而殺之，惟茂母李氏，性妬險，凡拒命殺戮，多其敎也，及敗，盛服懷珍寶，欲逃，趙璥妻子，至門伺之，捽髮批頰，又里有宿怨者，爭聚裂脫其衣，觀者如堵，不得匿，遂入芹田，兒童，爭以瓦礫擲之，後幷其子惟幹・惟柜・惟提等，執送蒙古。

13–1)（史料10）　13–2)（史料11）　13–3)（史料12）

趙彝　金裕　李樞

趙彝，初名藺如，咸安人，嘗爲僧歸俗，學擧子業，中進士，後反入元，稱秀才，能解諸國語，出入帝所，譖曰，高麗與日本鄰好，元，遣使日本，令本國鄉導，元宗，遣宋君斐，偕元使如日本，至巨濟，因波險乃還，王，遣君斐，如元奏曰，日本，大洋萬里，風濤險惡，且小邦，未嘗通好，帝，大怒詰責，於是，王，遣潘阜如日本，又遣安慶公淐，如元奏之，帝，以彝譖，怒不解，責淐甚嚴，淐還，彝，矯旨，勒留中路，淐，復入，告中書省，乃得還，淐，遂憂憤成疾，至東京，東京人，又拘傔從，劫奪馬價，然後放之，彝，常以讒毀爲事，竟不得志而死，有金裕・李樞者，亦反人也，裕，登第，永寧公綟之入質也，樞副韓就，選弓箭陪卒，裕，作詩求行，就，愛其詩，置選中，裕，既入朝，背本國，常欲奉使還，以逞其欲，乃語丞相安童曰，海東三山，有藥物，若遣我可得，安童信之，遂遣裕及申百川來，裕，矜其戎服，略無愧色，傳安童書曰，聞王國土產藥品，可備尙醫用者，今遣金裕等往採，可給人力，令收以歸，其藥品，海東三山液藥方，大嶺山香栢子六十斤・智靈洞全蜜四十斤・有體人參・合用造酒方，永同郡香麴子五十斤・南海島失母松五十斤，服藥後膳方，金剛山石茸六十斤・大嶺山南榧子五十斤・松膏餠三十斤，沐浴方，觀音松上水風眠松葉二百斤，及裕等還，王，遣譯語郎將康禧，答書曰，伏承鈞旨，諭以小邦所產藥品，令採進，就問裕等，一依名數，採進，但觀音松上水，未審所在，問諸裕等，則云在洛山上，卽欲道人，與裕等索之，反云多得風眠松葉，則松上水，無亦不妨，此曾啓都堂，稟旨而來，便不往索，若觀音松上水，本無之物也，松膏餠，則取松白皮熟鍊，灰水百杵，和蜜汁粘粉，乃作餠，裕，以爲自生松上，皆誑言也，樞，上將軍應公之子，初名唐古，嘗反入元，妄奏金漆・青藤八郎蟲・榧木・奴臺木・烏梅・華梨・藤席等物，產於本國，帝，信之，遣必闍赤黑狗及樞等，來索之，王，報中書省曰，今奉省旨云，王國未平，聖慮憐憫，令歲朝幣，不須進奉，所用金漆良多，今遣必闍赤往取，竊念，小邦所儲金漆，就陸時散盡，且其所產南方海島，比爲逆賊往來之所，當更乘間，往取奉獻，先將十缸以進，其瀝汁之匠，當就產地，徵來起遣，又黑狗口宣，榧木，土人謂之白木，問其產地於樞，則云昇天郡之今要島也，其靑藤八郎蟲，亦出於此，又於珍島・南海等處，皆產焉，其榧實・桐栢實，亦產此地，距王京千餘里，難以立致，樞，不自往見而返，玆與達魯花赤，遣人視其有無，待還具奏，先以榧木若干片奉獻，八郎蟲，則樞，初言產於喬桐郡，今度人往取，則無有也，又云，出於今要島，當復使人就審，其奴臺木・海竹・冬栢・竹簞，輒隨所有以進，烏梅・華梨・藤席，元非所產，背於西宋商舶，粗得若干，並此進奉，元，又遣樞來索大木，樞，因侵擾不已，王，欲悅其意，拜將軍，樞，伐大木，載以十艘，幷載其奴婢貨財而去，未幾，元，遣樞，又索材木，樞，欲入蔚陵島斫木，王，以大將軍姜渭輔，爲伴行，樞，以三品秩卑，言曰，三品如狗耳，吾不可與同行，乃以簽書樞密事許珙，代之，王，請于元，遂罷之。

14)（史料13）

韓洪甫

韓洪甫，樞城人，嘗怨其兄洪弼，反入蒙古，也速達，愛之如子，一日，紿也速達云，吾在本國，窖藏白金，人莫知之，且吾兄，家產頗饒，聞今已死，請往收兄財，及吾藏銀而來，也速達，許之，仍遣二人伴行，洪甫，至金郊驛，自計以爲，若偕二人入京，不可獨留，託語二人曰，今吾失冠，請還尋之，取他人鞍馬，匿草莽，乃後二人而來，言於朝曰，我之投蒙古，以吾兄故，本非背國，不勝懷土之情以來，未幾，也速達，牒云，樞城人韓洪甫，投入已有年矣，向者，請取本郡大井寺窖藏銀物而來，我令二人伴行，及到金郊驛，逃竄不還，兩國和好之約，不固者，實由此等姦人語言也，請捕送，時，洪甫，歸其鄉久矣，遣別抄，追捕之，也速達，又遣阿介等，來詰曰，洪甫・尹椿・閔偁・張升才・郭汝益・松山六人，何不遣還，曰松山・升才已死，洪甫，今猶未獲，閔偁・尹椿，流遠島，汝益無恙，阿介曰，死者已矣，若洪甫・尹椿之輩，可率以還，曰流者，路遠水深，不可訃日而致，亡命者潛匿幽險，亦難速得，阿介曰，雖幽險，亦國地，何不可得，於是，召還偁幷洪甫，執送于也速達，尹椿，嘗爲陽根城防護別監，蒙古兵圍城，椿，率衆出降，蒙古兵，選城中精銳六百，使椿領之，留

其兵三百鎭之，刈禾備糧餉，椿，移書春州防護別監鄭至麟諭降，至麟不聽，城守益固，蒙古兵，解圍去，後，椿，自虜中還言，諸將，勸車羅大，退屯西京，車羅大，辭以無詔，乃曰，吾寧死於此，豈可退兵，殊無歸意，車羅大，嘗將舟師七十艘，盛陳旗幟，欲攻押海，使吾與一官人，乘別船督戰，押海入，置二砲於大艦待之，兩軍，相持未戰，車羅大，臨岸望之，召吾等曰，我船受砲，必糜碎不可當也，更令移船攻之，押海人，隨處備砲，故蒙古人，遂罷水攻之具，今莫若屯田島內，且耕且守，清野以待，此，策之上也，崔沆然之，給椿家一區・米二百斛・豆一百斛，超授親從將軍。

15）（史料14）

于琁

于琁，鎭州人，元宗朝，以譯語，累遷郎將，嘗使蒙古，因留不返，與叛人陸子讓，請帝，以聖旨取家屬，王，上表曰，在昔春秋之義，尙不容三叛人，況今皇帝之時，何反受二賊，于琁，又與叛人金守磾，俱剃髮，在也速達營，訴曰，高麗有急，必遷濟州，今言復都舊京，非實，也速達信之，及太子，自蒙古還，至也速達營，也速達，欲令琁等對弁，太子曰，何信叛人之言，吾寧祝髮被拘於此，豈可與叛人弁哉，也速達，愧而遣還，只留樞密使金寶鼎・指揮金大材・譯語李松茂等，後，琁東還，聚林惟梱妻蔡氏，中書省以爲，朝廷，嘗督取林衍・惟梱家屬赴京，蔡氏，不遵朝命，漏網獨留，而琁娶之，罪莫大焉，遂移文達魯花赤，誅琁蔡氏，父樞密使仁撥亦坐，流靈興島，琁兄弟三人登科，其母，例當受廩，有司議曰，凡祿三子登第者母，爲其生文章輔弼也，今琁母，雖有登第三子，一爲逆臣，不宜與祿，遂止。

16）（史料15）

崔坦

崔坦，西北面兵馬使營吏也，元宗十年，林衍廢王，立安慶公淐，坦，與營吏韓愼・三和縣人校尉李延齡・定遠都護郎將桂文庇・延州人玄孝哲等，以誅衍爲名，嘯聚竜岡・咸從・三和人，殺咸從縣令崔元，夜入椴島營，殺分司御史沈元濬・監倉守奕・京別抄等，初，平章事洪鈞，再鎭西北，人懷其惠，稱爲父，淐，恐北方生變，以鈞子祿迺，代李信孫，爲兵馬使，祿迺至營，十日而亂作，祿迺，踰垣走，欲投海死，分道黃宗諝，止之曰，吾欲偵變，待吾還而死，亦未晚也，宗諝，良久不來，祿迺，以爲見害，俄聞有人，呼莫殺營主，祿迺乃還，坦使人，言於祿迺曰，前王再朝上國，以安東方，民受其賜，林衍，鎭州一兵卒耳，有何功德，操弄國柄，擅廢吾王耶，朝無忠臣，吾等奮激，欲誅首惡，復戴吾王耳，先平章，再鎭北方，活我民命，尙書，今又再來安撫，有先公之風，吾等，不忍背德，祿迺曰，君等，不忘吾父，延及後人，何感如之，請釋分道及隨使電吏，坦從之，祿迺等，遂還京，時，閤門祗候韓景胤，退老中和縣，使其子及弟旦，具坦等反狀，奔告于朝，以國子祭酒張鎰，爲兵馬使，率兵遣之，以安撫使李君伯，畏賊不得入而還，削其職，復遣前侍御史朴烋，代之，烋，請備儀而去，烋至大同江，張蓋踞胡床，俟賊出迎，賊，忽擊鼓而出，列騎江邊，使數人，拏舟來言曰，當今無主，宣諭使誰所遣乎，義無迎命，惟載從者一人而去，數林衍之罪，坦，殺西京留守崔年・判官柳粲・司錄曹英紱・竜州守庾希亮・靈州守陸德昌・鐵州守金鼎和・宣州守金義・慈州守金潤，其餘諸城員吏，皆沒於賊，成州守崔群，爲其下所殺，鼎和之妻，大卿李德材女也，初入境，恃其色，不障面，人皆知其美，至是，賊，縛鼎和於柱，淫之於前，金義，爲人慷慨，賊，使行酒，憤恚自縊而死，義州副使金孝巨，出獵于野，靜州戶長尹殷甫，聞變馳告曰，西京人，殺諸城守，欲投蒙古，孝巨，使郎將康用圭跡之，用圭，至靈州界，奔還曰，崔坦・韓愼等所爲也，俄而，坦等，率三十餘人，至大富城，時，蒙古使脫朶兒，來在此城，問其故，坦等詭言曰，高麗卷土，將深入海島，盡殺北界諸城人，故吾等，殺諸城守，欲入告上國，脫朶兒曰，近處諸城官吏多在，何不殺之，坦曰，欲禀於公殺之，脫朶兒曰，可執義・麟・靜三城守以來，餘皆殺之，於是，孝巨及麟州守鄭臣保・靜州守韓奮等至，脫朶兒曰，非我召之，實坦也，可往見之，孝巨曰，官人，前日累獵弊境，予每蒙護恤，感戴何言，第國法，不得越境故，不敢謁耳，今幸承喚，顚倒而來，請先謁官人，乃許之，孝巨，因進酒，從容言曰，今三城守，獲謁大官，雖死無恨，彼諸城守，無辜見殺，誠可憐憫，請遣使止之，脫朶兒，乃遣麾下二人止之，獲免者頗多，於是，孝巨等二十二人被執，歸于蒙古，明年，坦，馳奏蒙古帝云，京兵，欲侵我等，請遣天兵三千，來鎭西京，帝，賜坦及延齡金牌・孝哲愼銀牌，詔令內屬，改號東寧府，畫慈悲嶺爲界，以坦等，爲摠管，忠烈四年，王，與公主如元，至西京，公主，召延齡・愼，問其謀反始末，皆伏地背汗，不敢仰對，十一年，坦・愼・孝哲等，執文庇管下人，誣以此輩，與宰相廉承益，謀殺我等，遣人，告遼東宣慰使按察府，宣慰使，遣東京安撫摠管，來鞫之，明年，王，遣承益及金周鼎・趙仁規・柳庇等，偕來使，往東寧府弁之，坦等，服其誣，十六年，帝，罷東寧府，悉歸西北諸城，王，拜愼・文庇，爲大將軍，玄元烈爲大僕尹，羅公彥・李翰爲將軍，十八年，世子在元，帝，以愼等付之，命曰，此人，雖叛爾國，向朝廷有分毫心，爾勿大責，三十一年，愼，拜同知密直司事，從王如元，黨王惟紹讒毁，忠宣三十三年，與惟紹伏誅，籍家產，父子兄弟，皆沒爲奴，愼子方固・

用盉等三人，充驛戶，方固・用和，皆登第，至是，削名籍，忠肅十六年方固・用盉，皆許通，方固，出守梁州，用盉，拜成均學諭。

17）（史料16）

裴仲孫

裴仲孫，元宗朝，積官至將軍，十一年，復都開京，榜示晝日，趣令悉還，三別抄，有異心不從，王，遣將軍金之氐，入江華，罷三別抄，取其名籍還，三別抄，恐以名籍，聞于蒙古，益懷反心，仲孫，與夜別抄指諭盧永禧等，作亂，使人呼於國中曰，蒙古兵大至，殺戮人民，凡欲輔國者，皆會毬庭，須臾，國人大會，或奔走四散，爭舟渡江，多溺死者，三別抄，禁人出入，巡江大呼曰，凡兩班在舟不下者，悉斬之，聞者，皆懼而下，其或發船欲向開京者，賊乘小艇，追射之，皆不敢動，城中人驚駭，散匿林藪，童稚婦女，哭聲滿路，賊，發金剛庫兵器，分與軍卒，嬰城固守，仲孫・永禧，領三別抄，會市廊，逼承化侯溫，爲王，署置官府，以大將軍劉存奕・尙書左丞李信孫，爲左右承宣，初，賊謀作亂，將軍李白起不應，至是，斬白起及蒙古所遣回回於街中，將軍玄文奕妻・直學鄭文鑑及其妻，皆死之，叅知政事蔡楨・樞密副使金鍊・都兵馬錄事康之紹，逃亂出橋浦，賊騎，追不及，江華守卒，多亡出陸，賊，度不能守，乃聚船艦，悉載公私財貨及子女南下，自仇浦，至缸破江，舳艫相接，無慮千餘艘，時，百官，咸出迎王，其妻孥，皆爲賊所掠，痛哭，聲振天地，前中書舍人李淑眞・郎將尹吉甫，聚奴隸，尾擊餘賊于仇浦，斬五人，至浮落山，臨海耀兵，賊，望見恟懼，以爲蒙古兵已至，遂遁，淑眞，與郎中田文胤等，封府庫，使人守之，無賴者，不得盜，賊，入據珍島，剽掠州郡，王，命金方慶，往討之，明年，方慶，與蒙古元帥忻都等，率三軍，擊破之，賊，皆棄妻子遁，賊將金通精，率餘衆，竄入耽羅，初，守司空致仕李甫，判太史局事安邦悅・上將軍池桂芳・大將軍姜渭輔・將軍金之淑・大將軍致仕宋肅・少卿任宏，皆陷賊中，及賊敗，甫・桂芳，被殺，渭輔・之淑・肅・宏，得免歸朝，信孫隨賊，欲向耽羅，中路而還，邦悅，當還都時，卜于奉恩寺太祖眞，得半存半亡之兆，以謂亡者，出陸者也，存者，隨三別抄入海者也，乃隨賊南下，說賊曰，竜孫十二盡，向南作帝京之讖，於此驗矣，遂爲謀主，及賊敗，抽身將謁方慶，兵士擊殺之，存奕，據南海縣，剽掠沿海，聞賊遁入耽羅，亦八十餘艘從之，賊，既入耽羅，築內外城，時出剽竊，橫行州郡，殺守宰，濱海肅然，王，遣通精姪金贊及吳仁節等六人，招諭之，通精留贊，餘皆殺之，十四年，又命方慶討之，方慶，與忻都等，進攻之，賊大潰，通精，率七十餘人，遁入山中，縊死，耽羅遂平。

18）箭内亙著「蒙古の高麗経略」『蒙古史研究』所収，刀江書院刊，489～490頁，1930年初版，1966年復刻。
尹竜爀著『高麗対蒙抗争史研究』，一志社，343～349頁参照。

19）『新増東国輿地勝覧』第二，巻二十一，慶州府人物高麗金君綏の項参照。

20）『元史』巻二百八，列伝第九十五，外夷一，高麗条参照。
太宗三年八月，命撒礼塔征其国，国人洪福源迎降于軍，得福源所率編民千五百戸，旁近州郡亦有来師者。
「迎降」とは出迎えて降参する意であるが，『元史』巻二百八高麗伝に「詣軍中降」とあり，「江東城下の蒙古軍中に詣りて降りしもの」と解されている。箭内亙著前掲書457頁注２参照。

21）前掲書『新増東国輿地勝覧』巻五十二，三和県山川の項参照。
高麗元宗十年，林衍廃王立安慶公湄，西北面兵馬使営崔坦，与李延齡玄孝哲等，以誅衍為名。

22）同書，巻五十三，義州，人物高麗，丁五甫の項参照。
林衍擅廃立，聞世子東帰，遣兵待于鴨緑将軍脅之。五甫（孚）夜渡江告変。世子還朝以聞，帝詔王復位入朝，衍憂懼発疽死。

23）同書，巻二十一，慶州名宦高麗嚴守安の項参照。
元宗自元請兵而来，将復古都。林惟茂欲拒之。

24）同書，巻二十九，開寧県人物高麗洪禄遒の項参照。

25）曹永年等撰，『蒙古民族通史』第２巻呼和浩特，内蒙古大学出版社刊，2002年，202頁。